

中山間地域の現状と 新しい地域社会の形成に向けて

—長野県木島平村糠千区を事例に—

久保 唯香 (1T100351-8)

早稲田大学文化構想学部社会構築論系都市地域論ゼミ (浦野ゼミ) 4年

2014年1月16日

中山間地域の現状と新しい地域社会の形成に向けて

—長野県木島平村糠千区を事例に—

久保 唯香 (1T100351-8)

早稲田大学文化構想学部社会構築論系

都市・地域論ゼミ (浦野ゼミ) 4年

<目次>

序章.....	3
第1章 過疎とは一時間軸と空間軸でとらえる過疎.....	6
1-1 過疎化の経緯.....	7
1-2 「過疎」とは何か.....	10
1-3 現代の過疎と分析の視点.....	12
第2章 流動する社会とその構造.....	14
2-1 農村・都市社会学の系譜.....	14
2-2 土着型社会と流動型社会.....	17
2-3 混住化社会研究の課題と展開.....	20
第3章 中山間地域の現状と地域社会の対応—長野県木島平村糠千地区.....	22
3-1 長野県木島平村糠千区とは.....	22
3-2 糠千区のコミュニティ形成.....	29
3-3 糠千区の住民と生活.....	34
3-4 事例の総括.....	37
第4章 糠千区における多様性とその形成過程.....	41
4-1 糠千区における多様性の形成過程.....	42
4-2 糠千区における「都市・農村交流の地域づくり」の展望.....	47
第5章 中山間地域と「過疎化」の展望.....	50
5-1 中山間地域における「半農半都市」.....	50
5-2 中山間地域と「過疎」のこれから.....	51

終章.....	53
謝辞.....	57
参考文献一覧、付属資料、写真.....	59

序章

国土の大部分を森林が占める日本において、農村は長年、人間生活の基盤を支える重要な役割を果たしてきた。多くの文化や知恵が農村の生活の中から生まれている。互いの労へのいたわり、生活の安定と豊作への人々の祈りがうまく具現化されている「祭り」は好例である。祭りは今でも都市を含む多くの地域でこの現代に継承されている。農村は、近代化が進行し、都市との対比の中に農村が描かれるようになって、農村は食糧や水資源の供給地として、教育空間や保健休養地として、機能を果たしてきた。人の手が加わった肥えた土地は、洪水の防止機能や国土も保全する。農村は、自然との共生と調和の中に人間が生きる術を蓄える場所である¹。

農村の機能を保持する力が急速に失われ始めたのは、高度経済成長期のことである。技術の発達はその生活に利便性をもたらした。すると、生活と生産活動が一体化している農を基軸とする生活（土着型社会）を営む人の多くが、生産効率の最大化と貨幣主義に大きく傾向し、結果的に労働が土地とは乖離している状態へと生活を変えていったのである。こうしてそれまであいまいな位置づけであった農村と都市が明確に形成され、それらは相互に関係を持つようになった。そして、農村の一部の地域では機能維持が困難になるほどの人口構造の変化を経験する。これが「過疎」の現象である。

一部の地域における「過疎」の急速な進行は社会に衝撃を与えている。後述する「限界集落」【大野、2005年】という言葉が、地域の担い手不足で消えていく地域の様子を映し出している。「限界集落」の様子はドキュメンタリーやニュースでもたびたび報じられ、多くの人が知る社会問題に発展した。その社会の反応が事態の深刻さを物語っている。

ここで注意したいのは、農村が急速に衰退しているとしても、農村という存在が急になくなるわけではないことである。当然、都市に多様な顔があるように、農村にもそれぞれの構造が存在する。例えば、「マージナルエリア」（混住化社会）である。農村と都市という枠組みが形成される過程、つまり、都市という空間に効率的産業が集積され人口が集中することを社会学では「社会化」あるいは「社会の分化」²と呼ぶが、この「分化」が起こる過程には、都市と農村が交わるいわゆる「マージナルエリア」（混住化社会）が存在する。都市の住民と農村の住民が「混住」している状態の「マージナルエリア」（混住化社会）では、都市と農村の機能が入り交じり相互に影響しあう。社会学者の鈴木栄太郎は結節点にあたる地方都市がこの混住化社会であると指摘している³。鈴木を筆頭に、1970年代の社会学は農村から都市へ人が流動し、社会化する過程をえがきだしているが、この混住化社会が「社会の分化」によって結節点に現れるという認識が後で重要になってくる。

さて、一方で、昨今「山ガール」「スローライフ」「農業体験」「グリーンツーリズム」など、都市とは異なる農村の美しさを謳う言葉が世代を超えて流行している。農村集落の衰退や人口減少には追い付いていないものの、農村への自主的な移住が存在しているのも事実である⁴。この現象は、土地に依存した生活から選択の自由を獲得した（つまり、「社会分化」を果たした）個人が都市生活の中で平準化され、感情生活が無性格なものになった結果⁵、

地域社会に回帰する現象といえ、アルビン・トフラーは「第3の波」⁶と呼んでいる。

その都市と農村が交流しようとする傾向は、従来の〈農村→都市〉とは異なる方向性を持った人口流動と位置づけることが可能である。その場合、〈農村→都市〉の人口流動の過程で発生する「マージナルエリア」(混住化社会)とは異なる、それを超越した、「混住化」(あるいは「混在化」)社会が存在するかもしれない。

長野県木島平村、中山間部に位置する糠千区は積極的に都市住民を受け入れる地域である。この地域での調査で分かったことは、従来の「マージナルエリア」(混住化社会)の空間軸・時間軸とは一線を画した中山間地域に〈都市→農村〉の人口流動が微小ながらも発生しており、さらにその混住(混在)が住民の積極的選択によって存在しているということである。この積極的な選択的混在は、過疎化が進みすでに過疎状態にある多くの中山間地域で一部共通している「半農半都市化」状態が住民と関係者の行動に表れた結果と位置づけられる。

そこで本稿では、糠千区を都市との開放性の中から分析し、中山間に位置する過疎地域で何が起きているのかその現状を述べる。さらに、その状態がこれまでの過疎研究に示すものについて述べ、過疎を都市と農村のつながりの中でとらえ、つながりの中から過疎地域の可能性を見出すことを目指す。

過疎を論じるにあたって、まず「過疎」について理解しなければならない。そこで第1章では「過疎」の定義をめぐる議論に触れたうえで、人口動態データや産業構造の変遷から過疎化の経緯を述べる。そして、「過疎」がどのように理解されてきたか、特に〈農村→都市〉人口流動論について、議論をまとめる。第2章では第1章で述べた変遷を踏まえ「過疎化」の現状を把握し、その現状を問うための切り口を見出すための先行研究を行う。特に、農村社会学と都市社会学の功績を述べたうえで、その議論に足りない現代の過疎をいかにとらえるかに焦点をおく。そして、長野県木島平村糠千区を扱う第3章では、事例をもとに中山間地域の現状を分析する。ここで中山間地域と過疎に対する視点を提示したうえで、第4章では糠千区における社会の分化についてさらなる考察を加える。第5章では、糠千区の事例からわかる中山間地域への理解を深め、今後の過疎の展望について述べることにする。

本稿では、住民の主体的な選択と社会構造の関係性を明らかにするため、以下のような調査方法を採用した。

【実地調査の方法】

① 地域史等による文献研究

② 聞き取り調査

- ・木島平村役場(教育委員会、産業建設課 交流産業室)
- ・農村交流型産業推進協議会
- ・公民館館長
- ・糠千地区区長、副区長、ものずき会会長など
- ・(産業課に出入りしており、村づくりの中心となっている)農業従事者

- ・金沢大学、早稲田大学担当教授・職員
- ・その他の中山間地域住民（馬曲区）、平野地域住民（中村区、西小路区など）

③ 糠千区民へのアンケート調査

主に世帯主への聞き取り。アンケート調査は木島平村糠千地区の住民関係と意志合意形成を研究している馬場千遥さん（金沢大学農村地理学専攻）の調査票（2013年）を参照させていただいた。）

調査にご協力いただいた方々へ感謝を込め、農村と都市の将来に有益な情報となることを祈りながら本稿に過疎の一考察を記すこととしたい。

1 「農業の多面的機能」（農林水産省農村振興局農村政策部中山間地域振興課中山間整備推進室、

http://www.maff.go.jp/j/nousin/tyusan/siharai_seido/s_about/cyusan/tamen/index.html
2013年1月19日最終閲覧）

2 社会の分化について詳しく語っているのが G.ジンメルである。ジンメルは近代化のプロセスが集団の分化を発展させ、分化した集団において個人が自由になる過程を述べている。【鈴木広・倉沢進 編著、1984年】

3 徳野貞雄「現代農山村の内部構造と混在化社会」『地域社会学の現在』第2章（鈴木広監修、2002年）を参照。

4 「人口動態調査結果」『平成24年（2012）人口動態統計（確定数）の概況』厚生労働省 <<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/kakutei12/index.html>>（2013年11月20日最終閲覧）

5 三浦典子「流動型社会学の系譜」『地域社会学の現在』第2章（鈴木広監修、2002年）

6 山本努『現代過疎問題の研究』（1996年）を参照。

第1章 過疎とは一時間軸と空間軸でとらえる過疎

本稿は中山間地域の現状を理解し、都市との関係の中から過疎地域の展望を問うことを主眼としている。本章の議論を円滑に進めるために、まず本稿における「中山間地域」の位置を確認しておく。「中山間地域」とは、特に本稿では社会学の中で論じられてきた「山村地域」の一部とする¹。一般的に「山村地域」とは森林に囲まれた地域であり、集落を基本単位とする共同体と考えられている。大野晃（2005年）はこの「山村地域」の定義について、その産業に注目し、「地域の大部分が森林であり、山地農業と林業が生活基盤を構成している人々の生活社会」[大野, 2005年, pp.7]と定義している²。しかし、この「山村地域」の定義にはその地域に居住していながらも「山地農業と林業が生活基盤を構成して」いない人々（本稿の対象者）が含まれていない。そのため、本稿では便宜的に分析対象地域を「中山間地域」とし、現時点では「山がちな地形や環境の困難性により農業の継続が難しくなったが、住民個々人の判断（選択定住）で集落として存続している地域。土着型社会と流動型社会が混在している地域」と位置づけることとする。「中山間地域」を用いるのには、本稿の対象地域ではその地域のことを自ら「山村地域」と呼ぶことはほとんどなく、農業実務の中で馴染みの強い「中山間地域」を多用しているという背景があることも忘れてはならない。

さて、農村の中でも特に上流域に位置している中山間地域の管理や維持が農業において重要な役割を果たしていることは言うまでもない。さらに、居住空間として、そして文化の保存場所としても存在価値は高い。中山間地域の住民は、外部とは確立された空間の中で長い時間を自然と共に過ごし、独特な社会を形成してきたのである。一方中山間地域は、農村が抱える人口流出、少子高齢化、そしてそれらが起因する地域の機能不全がどの地域よりも先駆けて進行している地域でもある。中山間地域に特異性を生み出してきた地形そのものが、集落間における格差の原因ともなっているのである。現代の過疎は、地域（あるいは集落）間の違い、つまり多様性を無視しては語れなくなっている。

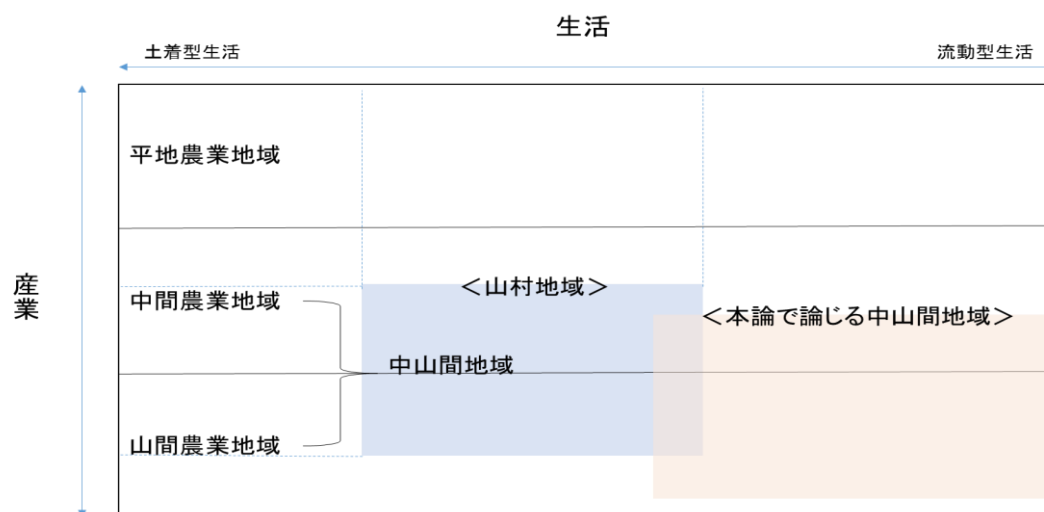


Figure 1-1 地域の定義

本章では、過疎の傾向と現状を 1-1 でまとめたうえで、本稿で中山間地域の現状を述べるうえで重要な概念である「過疎」を定義づける (1-2)。過疎の多様化を論じたうえで、現代の過疎を理解するうえでどのような視点と切り口を持つべきかについてふれる (1-3)。

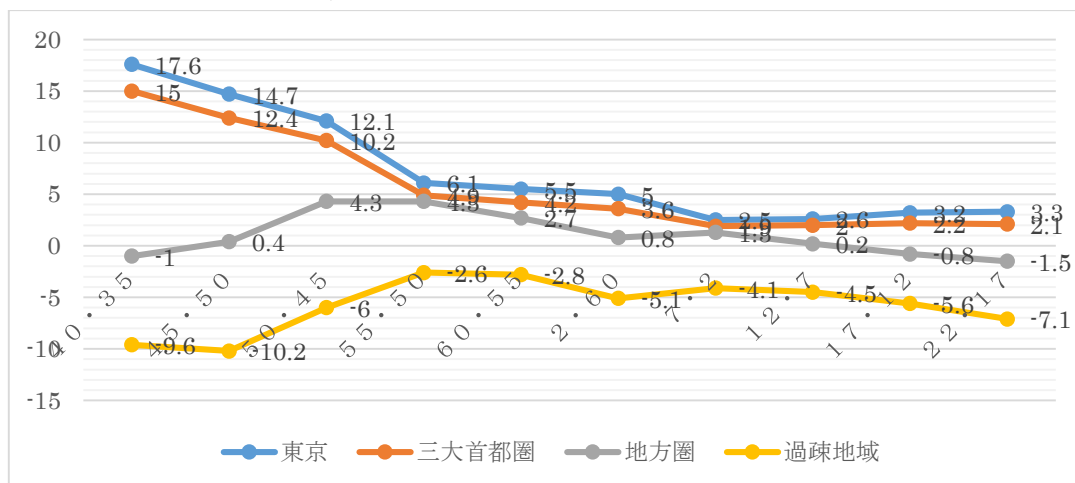
1-1 過疎化の経緯

国勢調査における人口動態の推移は、社会的環境の変化と人口流動の関連性と、社会変動のダイナミズムを示している。高度経済成長期初期の 1960 年からバブル期、そしてバブル崩壊後 2000 年までの間に東京、都市圏、地方圏、そして過疎地域で、それぞれ大きな変化があった。

Table1-1 は全国の過疎地域、東京圏、三大都市圏、地方圏、過疎地域の人口増減率の推移を示している³。人口流動が＜農村→都市＞であるとするなら、東京の人口増加率と過疎地域の人口減少率には相関性があると考えられる。その場合、第一に、1960 年から 1965 年間に人口移動がピークを迎え、その後 1980 年にかけては流出が急激に緩和されていることが分かる。ピーク時には東京の人口増加率は 17.6%、過疎地域は-9.6%で、その差は 27.2 ポイントとなっている。高度経済成長期のインパクトは、1960 年代から 1970 年代にかけて大きかったようである。

第二に気が付くのが、1980 年以降の緩やかな人口流出傾向である。流出緩和傾向は 1975 年から 1980 年を最後に流出傾向に転じ、現在も緩やかに流出が続いている。国内総人口の減少傾向も影響しており、首都圏の人口増加率の増加現象は非常に緩慢である一方で過疎地域の減少率はピーク時に近づく勢いがある。

Table 1-1 過疎地域、三大都市圏、地方圏等の人口増減率の推移⁴



注) 1) 国勢調査を参照。

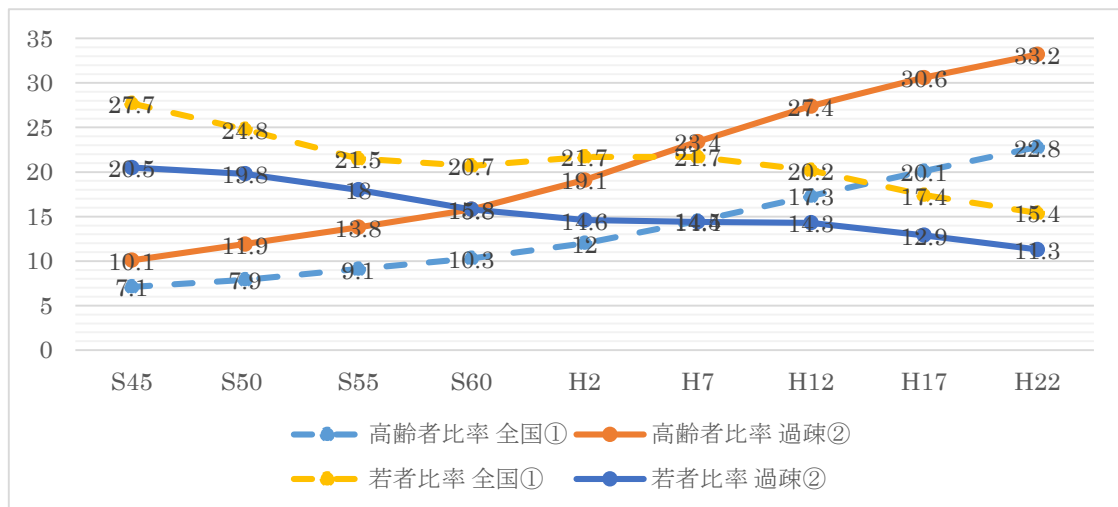
2) 過疎地域は、平成 24 年の基準を採用。

3) 三大都市圏とは、東京圏、大阪圏、名古屋圏をさし、地方圏とは三大都市圏以外の区域をいう。

第三に、動向の類型が可能であり、過疎地域と地方圏、そして東京圏と三大都市圏の傾向が類似していることが分かる。〈農村→都市〉の人口流動をさらに細分化すると、〈過疎地域→地方都市〉、〈過疎地域→三大首都圏〉、〈過疎地域→東京〉、そして〈地方都市→三大首都圏〉、〈過疎地域→東京〉、さらに〈三大首都圏→東京〉という 6 つの可能性が考えられるが、Table1-1 で過疎地域と地方圏で同じ傾向があることから、〈過疎地域→地方都市〉の流動よりも過疎地域・地方都市から東京・三大首都圏への人口流動のベクトルが強かったことが分かる⁵⁾。

それでは、人口流動が地域の人口構成にどのような影響を与えたのかを確認しよう。Table1-2 は高齢者率と若者比率を示した図表である。1960 年の時点で過疎地域における若者と高齢者の比率は全国のそれらよりも値が近く、総人口における高齢者率が高いことを示している。この図表には 2 つのポイントがある。まず一つ目は、過疎地において高齢者比率が若者比率を上回った 1975 年。2 つ目のポイントは 2000 年で、全国の高齢者比率が若者比率を上回った。過疎地域は全国より約 25 年早い少子高齢社会を迎えていることになる。過疎地域における少子高齢化は全国に先駆けていることが事実となった。

Table 1-2 高齢者比率および若者比率の推移



注) 1) 国勢調査を参照。
 2) 過疎地域は平成 24 年。
 3) 高齢者比率、若年者比率ともに加重平均。

また、過疎化が問題視される背景には、人口減少が地域活動や自治に支障をきたすなど様々な弊害が起こったことがあげられる。「地域の担い手不足」は地域の構造までも衰退させる力を持っていた。

さて、過疎化の傾向は、地域への一様な過疎化の進行を意味するものではない。むしろ、

過疎化は都道府県間の格差、自治体間の格差、さらには集落間の格差を助長させるほどに多様化している。[大野晃, 2005 年]

たとえば、長野県木島平村を挙げてみよう。図①、図②は木島平村と村内の一自治体である糠千区の世帯数推移、図②は人口推移を示している。木島平村は人口約 5000 人を有する行政区である。馬曲川と千曲川にはさまれた扇状地が特徴的で、農業を基盤とする村づくりが進められている。糠千区は人口 108 人 (2010 年) の自治区で、平野部から〇〇km 離れた中山間地域に位置している。木島平村と糠千区の人口の推移はほとんど同じ傾向をたどっているが、一方で世帯数は異なる傾向をみてとれる。木島平全区をみると人口が減少しても世帯数に反映されるのには時間がかかることが分かる。少なくとも 20 年の間には 1 世代または個人の移動が一般的で、世帯の移動にはいたっていない、あるいは環境が厳しい中山間地域から平野部への村内移動が行われているなどの理由が想定される。一方、糠千区においては、人口流出がほとんど直接世帯数の現象に影響している。同じ「過疎地域」でも、その現象は「地域」の枠組みによって異なるのである。それはたとえ村をさらに細分化した自治区を単位とする「集落」という枠組みであっても、「区画」、いってしまえば「家族」という枠組みにおいてもそれぞれの傾向を確認することができ、それはその単位によって異なる。結局のところ移動の動機は個人の生活構造に依存するのである。過疎の実態を研究するためには地域の文脈だけでなく個人の生活構造を明らかにしていく必要がある。

Table 1-3 木島平村と糠千区における過去 20 年間の人口推移

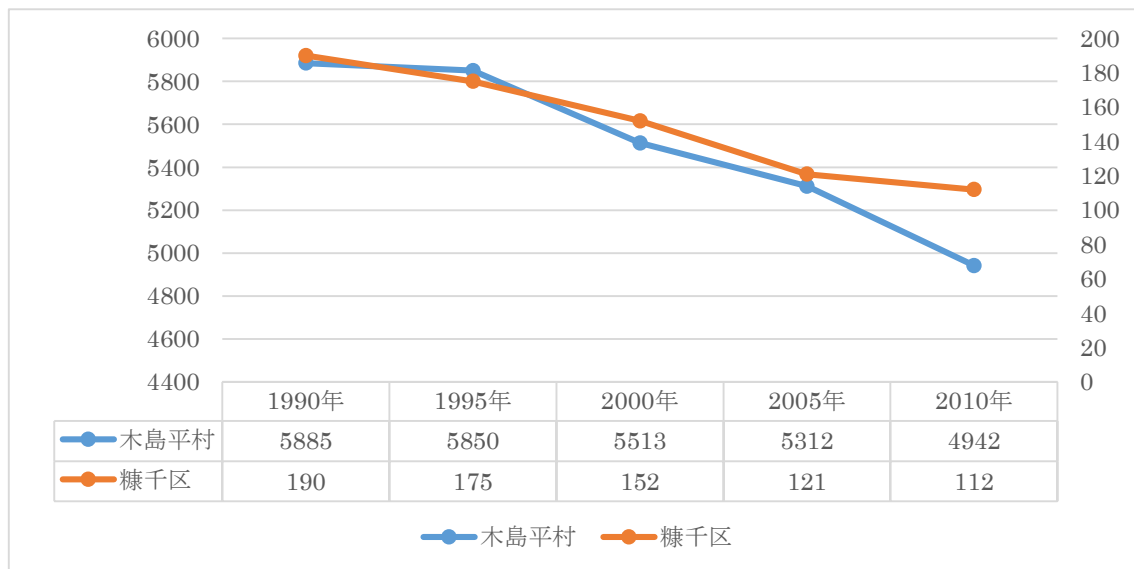
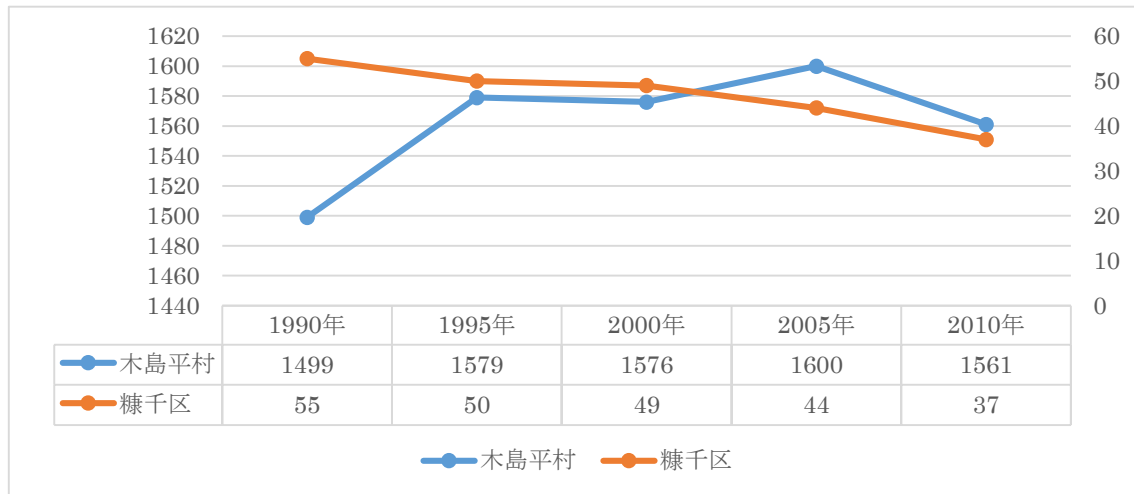


Table 1-4 木島平村と糠千区における過去 20 年間の世帯数推移



木島平村と糠千区における人口動態の比較からわかるのは、糠千区は木島平村全区の傾向よりもずっと敏感に人口流出を経験していることである。中山間地域における過疎の傾向は同じ山村でも主要産業をもつ平野部に比べ急速に進行しているといえる。実際に農村地理学の過疎地域研究では中山間地域では 8 割の市町村で人口が自然減であることが明らかになっている [田畑保編, 1999 年]。

1-2 「過疎」とは何か

1-1 では過疎の傾向を概観した。特徴的だったのが、＜農村→都市＞の人口流動の、面的な広がりである。1960 年以降の大きな社会の変化に対し、特に東京圏・三大首都圏と過疎地域・地方都市の間で大規模な人口流動が起こった。さて、人口流動が面的に広がる一方で、地形などが原因となり集落の間でさえも構造に差が生まれている。これを「集落間格差」と呼んだ。これらの傾向を踏まえ、この現状を謳う「過疎」とは、いったい何をさすのであろうか。「過疎」の定義については、これまで様々な議論が寄せられてきた⁶。しかし、「過疎」はあらゆる地域に当てはまる事象をさすあまりに意味が曖昧となってしまう、文脈によって解釈が異なるのは確かである。

初めて「過疎」という言葉用いられたのは 1967 年 3 月に公開された経済社会発展計画⁷である。その公式文書には、過疎について以下のように述べられている。「人口減少地域における問題を『過密問題』に対する意味で『過疎問題』と呼び、過疎を人口減少のために一定の生活水準を維持することが困難になった状態、たとえば防災、教育、保健などの地域社会の基礎的条件の維持が困難になり、それとともに資源の合理的利用が困難となって地域の生産機能が著しく低下することと理解すれば、人口減少の結果、人口密度が低下し、年齢構成の高齢化が進み、従来の生活パターンの維持が困難となりつつある地域では、過疎問題が生じ、また生じつつあると思われる。」また、別の個所には「人口減少のために一定の生

活水準を維持することが困難となった状態、たとえば防災、教育、保健などの地域社会の維持が困難になり、それとともに、資源の合理的利用が困難となって地域の生産機能が著しく低下すること」（経済審議会地域部会報告、1967年）とも記されている。つまり、経済社会発展計画による「過疎」とは、都市における「過密」状態に対峙する概念であり「過疎問題」とは人口減少によって引き起こされる地域における弊害をさす。このように、過疎の概念は解決の対象となりうる「社会問題」からスタートした。1969年には以後4回にわたる過疎対策法の駆け出しとなる過疎地域対策緊急措置法が制定された(Figure 1-2 参照)。

<人口流出論>

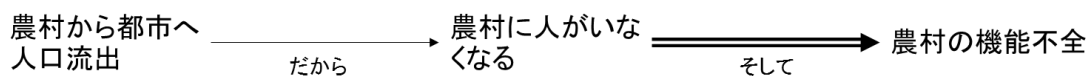


Figure 1-2 人口流出論とは

※人口流出に起因する過疎の考え方が「人口流出論」である。

この過疎の概念をめぐって、渡辺（1967年）が加えた分析は過疎への理解をより具体的にさせた。渡辺は、これまでの「過疎」の議論が人口自然減少、自然増加率の減少、地域人口の再生産力が低下している状態、つまり、地域を担う労働力が枯渇し地域を担う体力が枯渇化している状態に終始していたことを指摘した。これを人口論的過疎という。加えて、過疎には人口論に加え社会的・経済的機能低下の側面がある。渡辺はこれを地域論的過疎と区別した。さらに、渡辺によると、地域論的過疎は2つに分類することができる。一方は「社会的過疎」であり、人口が減少したために一定の生活の質と水準を保つのが難しい状態をさす。他方は「経済的過疎」である。これは労働力人口が減ったため地域の経済生産活動が低下し、社会資源が放置された状態をさす [渡辺, 1967年 a]。山本（1996年）は地域論的過疎と人口論的過疎が相互に関係しあうと述べている。人口の自然減は高度経済成長期が始まった1960年代から顕著になり始めたが、地域論的過疎化が進行し始めたのは1990年代ごろからである。以降、山間農業地域や中間農業地域で人口論的側面と地域論的側面の両側面で急速に地域の衰退が進んでいる。山本（1996年）は加えて、過疎の深化に伴い特に人口論的過疎は面的に全国に広がりつつあることを明らかにした。特に、地域論的な過疎が人口論的な過疎を深化させる状態を「現代過疎問題」と論じている [山本, 1996年] (Figure 1-3 参照)。

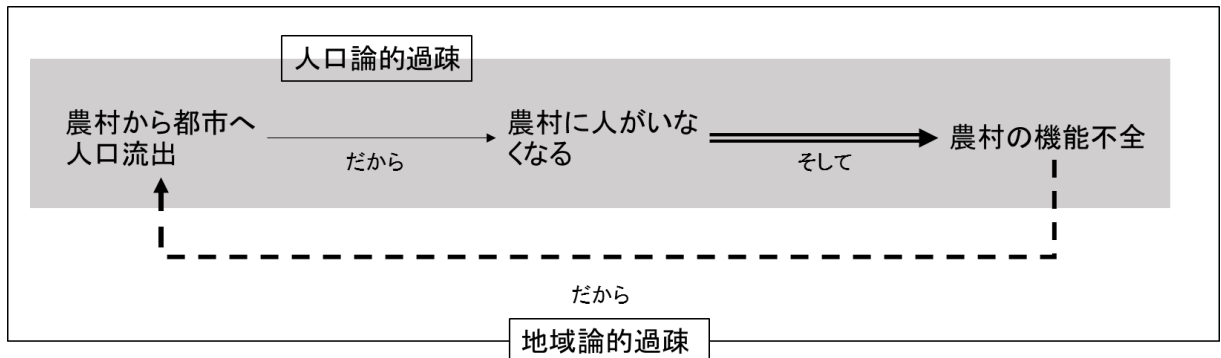


Figure 1-3 人口論的過疎と地域論的過疎

1-3 現代の過疎と分析の視点

1-1、1-2 より「過疎地域」とは、東京や三大首都圏に人口が流出した地域、特にその中でも地域の機能が低下している地域を示す。そして、過疎への経緯には社会背景が色濃く反映されていた。国勢調査の分析によれば、都市への人口集中と過疎地域の人口流出は 1980 年代まで回復の傾向にあったが、バブルの崩壊以降、緩やかに拡大傾向である。

過疎と地域性の関係性は特注すべきである。過疎の現状が多様化しているということが木島平村の例で分かった。深化のスピードは特に山間地域や中間地域で早まっているが、そのスピードは一律ではない。現代の過疎問題は、これまでに比べてより地域性が強くなり、多様になった結果、複雑性を増している。現代の過疎研究の課題は、都市と農村という枠組みを超え、多様化する個別の社会がいかに過疎に対応しているかを明らかにすることである。

このような現代特有の過疎を理解するためには、どのような分析軸が必要なのであろうか。本稿では過疎化の経緯と定義づけの議論をふまえ、中山間地域におけるアプローチとして 2 点を挙げたい。第一に、農村を都市との関係の中にとらえ、開放性の中でいかに地域が形成されているか分析することである。それは、地域の内的な分析だけではなく、地域を外部と関係づけて分析することである。人口論的な移動に加え、地域論的な視点をもつことで、地域と人の関係性を明らかにすることができよう。

そして第二に職業や人口構造という軸で都市かと農村のかといったような分析をするのでは、重層化する地域に対応することはできない。むしろ、地域の個別性と多様性によっていかに地域が形成されるのかを分析すること。その際、地域社会は多様な人々によって多様化していることを理解し、より個人レベルの「生活構造」に着目する。「生活構造」は個人の自由な選択が生活をどう決定づけているか、個人の生活と意思決定に地域がいかに関わっているかを分析することによって明らかになる。また、この分析軸は第一のアプローチにも密接に関わっている。住民の生活構造に、地域の閉鎖性だけではなく開放性を見出さなければならない。

次章では、上記のアプローチをさらに補強するため、過疎化をめぐる議論をまとめる。

¹ 「中山間地域」は、地域社会学、農村社会学よりむしろ、農村地理学や農学において盛んに用いられる表現である。農林統計によれば、農学あるいは農林水産業の実務上、農業地域類型区分の中間農業地域と山間農業地域を合わせた範囲と定義されている。農村地理学や農学における「中山間地域」と類似した言葉として、地域社会学では「山村地域」、そして狭義の意味で「土着型社会」を用いることが多い。

² 大野晃 (2005 年)。大野は山村概念を考察している文献として 3 点を挙げている。①藤田佳久「わが国における山村研究の寄付と山村の概念」『山村研究年報』2、1981 年、②岡和夫「林業政策の現段階」『日本農業年報 40—中山間地域対策』農林時計協会、1993 年、③秋元元輝「20 世紀日本社会における『山村』の発明」『年報村落社会研究』。大野の研究は自治体内に存在する格差や集落間の格差に目が向けられており、全国レベルの動向分析に加え、都道府県、各集落、それぞれの動きを分析し、山村地域を、都市を含むレベルでとらえた点で異彩を放っている。さらに、集落に状況区分を加えることで集落の状況分析を加速させようとし、人口構造を分析したうえで、「存続集落」「準限界集落」「限界集落」「消滅集落」といった区分を提言している²。大野は集落の状況を「過疎化」という問題を解決しようという文脈で再生論を論じている点で、従来の農村研究とは視点が異なる。

³ 「過疎地域」とは、現在過疎認定を受けている町村区のことを示している。

⁴ 総務省自治行政局過疎対策室『過疎対策の現状』pp.3 図表 4 を引用【総務省自治行政局過疎対策室, 2013 年】

⁵ あくまで傾向であり、＜過疎地域→地方都市＞の流動を否定するものではない。

⁶ 山本 (1996 年) は、伊藤義市 (「総論—地域開発の政策の展開—」『過密・過疎への挑戦』、1974 年、池上徹 (『日本の過疎問題』、1975 年)、安達生恒 (『過疎地再生の道』、1981 年)、内藤正中 (『過疎問題と地方自治体』、1991 年) などを挙げている。

⁷ 総務省ホームページ「過疎対策」参照<

http://www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi_gyousei/c-gyousei/2001/kaso/kasomain0.htm
> (2013 年 12 月 7 日最終閲覧)

第2章 流動する社会とその構造

第1章では都市化と過疎化の経緯を述べたうえで、過疎概念の定義について論じた。過疎とは、人口的な社会構造と地域的な社会構造の弱体化が相乗的に引き起こす現象であった。さらに、現代の過疎とは地域的過疎が人口論的過疎の起因となる状態をさした。そして、決して地域を「過疎」と一様にまとめることなく、その多様性を認めること、むしろ過疎の多様性を研究の中で重視すべきことを述べた。また、第1章の最後に現代の過疎を考えるうえで重要な視点を2つ（①農村を都市との関係の中にとらえ、開放性の中でいかに地域が形成されているか分析すること、②地域の個別性と多様性によっていかに地域が形成されるのかを分析すること）を提示した。この2つの視点は、現代の過疎研究の課題にも大いに関係がある。

近代化の進行とともに日本の社会的な価値観は大きく転換し、農村や都市では社会の在り方は変化した。過疎研究の発端となった農村社会学と都市社会学、それぞれの研究はこのような社会変動の中で生じた社会問題の解決をめざし発達したのである。以降、都市と農村をめぐる、様々な議論が続けられており、現在は過疎の概念も都市と農村の関係性の中に位置づけられている。ここで特に重要なのが、いかに地域の多様性を都市と農村の関係の中から描き出せるか、である。そこで、本章では第1章をふまえながら農村や都市まで含めた地域社会と過疎を巡る議論についてさらに詳しく述べる。過疎に直面する中山間地域の多様性を理解するのに必要な切り口を模索することを主眼とする。

本章の流れを簡単にまとめておこう。まず2-1では過疎研究の土台をつくった近代化の中の都市・農村研究の経緯を述べる。その課題にふれたうえで、2-2では、地域社会学と流動型社会論にふれその分析枠組みをまとめる。そして2-3では再び本稿の問題意識に戻り、次章以降の分析方法を述べていく。

2-1 農村・都市社会学の系譜

始まりの農村社会学

社会学上、過疎研究の土台となっているのは農村社会学といってよいだろう。特に戦後の農村社会学は福武直、鈴木栄太郎、有賀喜左衛門を中心に、それまでの村落共同体論ではなく近代化における農村の民主化を主題に研究が進んだ。

農村社会学の発達には、GHQの民主化政策が起因している。日本の社会を大きく変換させたGHQの民主化政策が都市と農村に引き起こしたさまざまな社会問題を解決しようと、農村社会学は農村の構造をみちびき出し、農村コミュニティを浮き彫りにした〔西村, 2006年〕。農村社会学は、農村の生活構造を明らかにする構造的な分析手法を生み出す方向に発展していった。村落構造を把握するうえで、地主と小作農の近代化、関係性の変化を明らかにした功績は大きい。

しかし、急激な機械化や資本主義に進行で多くの農村の経済・社会圏が都市的なネットワ

ークに組み込まれていった。農村社会学のような内向的な分析手法では農村の抱える問題を抽出し、解決策を生み出すことができなくなってしまったのである。二宮（1985年）は「農村村落の研究を、全体社会とは切り離して行ってきた。全体社会との関連を見失っては、農村の社会構造の基本的性格や、社会変動の原因とその方向を正確に把握できなくなった」と指摘している【二宮, 1985年, pp.109】。農村は都市との関係の中で語るべき存在への展開していき、農村研究はもはや農村社会学の領域を超えざるを得なくなった。

都市社会学と地域社会

さて、やがて都市社会の把握、進展、近代化に注目があつまるようになり、アメリカのシカゴ学派都市社会学の影響を受けて、鈴木栄太郎や磯村栄一を中心に盛んに研究が進められた。都市社会学の焦点は、農村とは異質の都市をいかに把握するかに集中していた。そこで都市の貧困問題を「病理」と据え、都市における社会関係に個人の役割を見出すことでその解決を目指した研究が進められた。

しかし、人口集中や都市の貧困を研究テーマとしていた都市社会学は、1960年以降「開発」の機運が高まり、農地開発に矛盾を抱えるようになる。つまり、都市社会学と農村社会学はいずれも高度経済成長期以来の急速な工業化で変質し、多様化した地域社会の中に生じる生活課題に対して答えをもつことができなかつたのであつた。西村（2006年）は「このとき農村社会学・都市社会学に求められたのは、どのように戦後から高度経済成長期への社会変動と地域社会の生活問題を把握し、その解決策をどこに求めるべきかであつた。（中略）そこで誕生したのが、国家・地方自治体・住民・資本の各論理から地域社会を据える地域社会学であつた」と述べている【西村, 2006年, pp.33-34】(Figure 2-1 参照)。

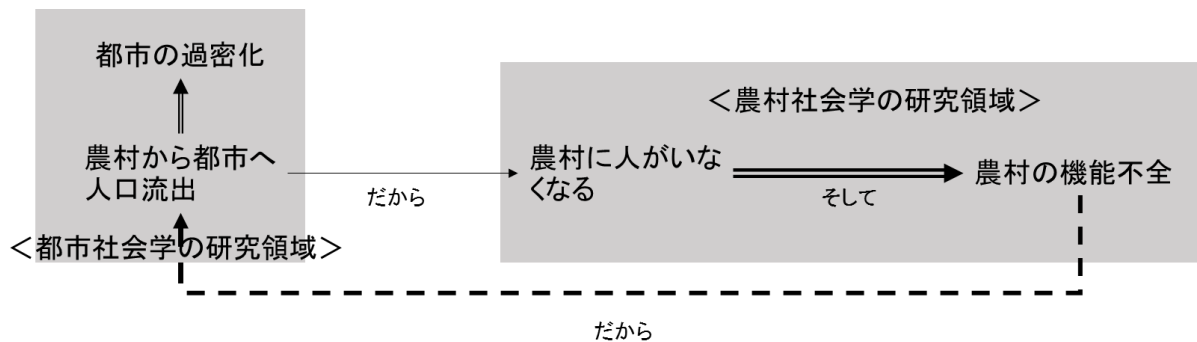


Figure 2-1 過疎分野における農村社会学都市社会学の研究過程

国家が主導してきた社会は環境問題や災害を転機に変質した。機密な意見を反映できない国家に代わり、社会は市民によって動かさねばならないという理想が登場する。この傾向の中誕生した地域社会学は、農村と都市に限定されず、むしろ双方を大きな構造をとらえようとする学問として始まった。

地域社会学と過疎研究

ここまで地域社会学の系譜を述べてきたが、つまり本稿で用いる地域社会学という切り口とは、農村と都市に限定されずむしろ双方を大きな構造をとらえ、地域という空間を軸に社会の課題（特に農村社会学や都市社会学で直面した社会の急速な近代化と変動によって生まれた矛盾）を分析しようとするものである。この意味で、地域社会学は社会的現象（たとえば「過疎化」）に着目した意味的研究と、地域というフィールド（空間＝地域）に着目した空間的研究という二重の命題を背負っているともいえる。この空間的な分析に社会の現象を意味の上で因果づけていくためには、どうしても空間＝フィールド上の経験的な分析を要する。そのため地域社会学には個々の地域をミクロの視点で分析し、最終的にマクロな社会に位置付けることが求められる(Figure 2-2 参照)。

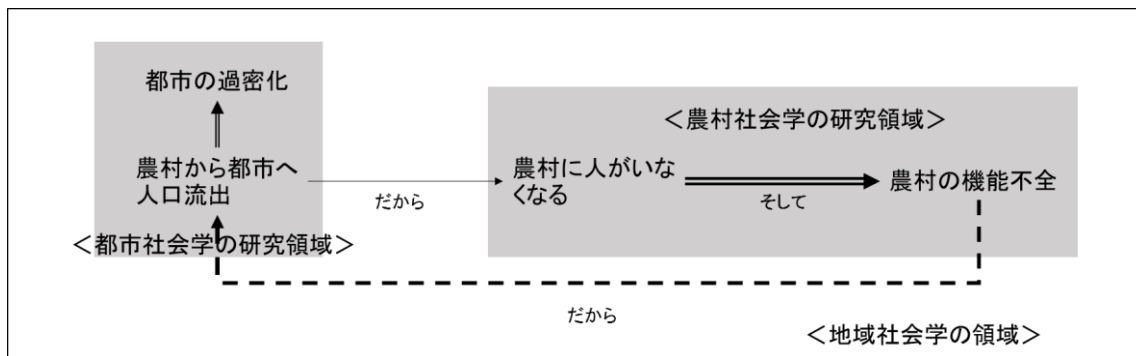


Figure 2-2 過疎研究における地域社会学の枠組み

この地域のミクロ的分析をマクロ社会に因果づける研究が現代の「過疎」を考えるにあたって重要になってくる。それは、現代の過疎がまさに農村社会学と都市社会学が直面した社会構造上の矛盾を抱えているからである。

初期過疎研究の中では、「過疎」は青年男女の流出ととらえられており、「残されたのは老人たちと子供だけ」 [今井, 1968 年] という状況をつくり出す人口減少をいかに食い止めるかに研究の主眼が置かれていた。しかし、その後山本 (1996 年) は、過疎の傾向が単なる人口流出ではなく「若者流出型過疎」から「若者流出型過疎+少子型過疎」へと変化していると述べている。つまり、過疎はもはや、1970 年ごろの「老人」と「子ども」が残された地域から「老人」が残された地域へ変容したというのである。

現代の過疎を考えるうえで注意したいのは、前述の「流出」の考え方に加え、少なからず中山間地域への選択的な定住・流入があることである [山本, 1996 年]。アルビン・トフラーは、標準化、極大化、中央集権化、資源・消費公害発生型生産システムを「第二の波」と位置付け、人口流出と過疎化を説明した。しかし、現代において「第二の波」は「第三の波」（脱規格化、妥当な規模、分権、分散・非都市化、物質的代謝型生産システム）に組み替え

られると言われている [A.トフラー, 1982 年]。中山間地域にも、都市の雑然とした生活から脱しようとする人々の動き、「第三の波」が反映されている可能性がある。つまり、過疎化という現状の中において、もはや人口流出は一つの現象でしかなくなってしまったのである。

加えて山本（2008 年）は大分県中津江村の研究を通して農山村の過疎化の現状と展望について明らかにしたうえで「今後の過疎農山村地域生活構造の分析には、従来の狭い（あるいは土着的な）農村社会学の枠組みのみならず、流動社会論的な方法や発想も含めた、地域社会学的研究が要請される」 [山本, 2008 年, pp.171]としている。現代の過疎研究は過疎地域だけをトリミングして研究するよりむしろ、都市との空間的かつ時間的なつながりの中で、人々の生活面から社会の構造を明らかにすることが求められているのである。

さて、ところで、「流動型社会論的な方法や発想を含めた、地域社会学的な研究」とは何であろうか。2-2 では流動型社会論とそれに含まれる生活構造の分析枠組みにふれ、混住化、混在化する社会をいかにとらえるかについて述べていく。

2-2 土着型社会と流動型社会

流動型社会論とは

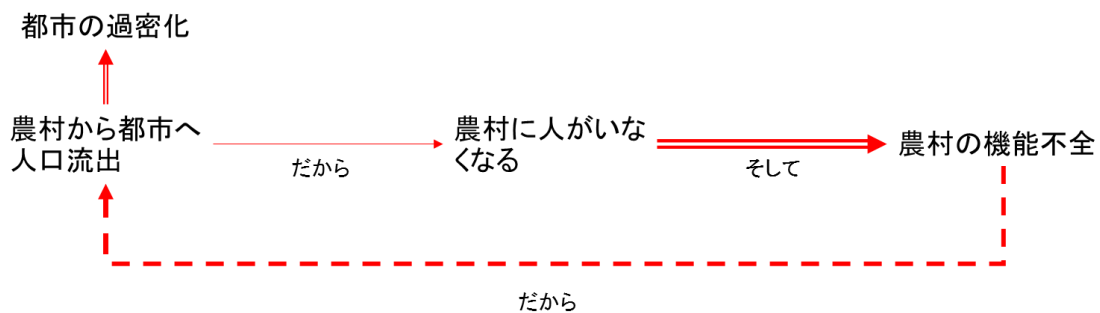
流動型社会論を詳しく述べているのが三浦典子（1984 年、1991 年、2002 年）である。三浦によれば、まず地域社会を住民の生活に焦点をあてて分類すると、「土着型社会」と「流動型社会」に二分されるという [三浦典子, 2002 年, pp.17]。この 2 つのタイプの最大の相違点は土地と住民の関係性にある。土地に経済活動を含む生活の拠点がある社会を「土着型」とよび、主に農耕社会を意味する。一方「流動」とは、「人々が一定の住所に定着しないで、あるいは長い期間その住所を離れて、広い地域に移動すること」 [蔵内, 1978 年]である。

大量生産、大量消費の資本主義社会の中では通常、社会が成熟していくにつれ効率的になり都市化が進むと言われており、これを「分化」と呼ぶ。効率性が求められるため、都市化の過程では生産と加工、販売がそれぞれ専門特化していく。この現象が「分業」である。この「分化」や「分業」を考えると、社会の成熟が一樣に＜農村→都市＞であるかのように理解されがちであるが、仮にこの考え方を前提とすると、流動型社会論における空間的な移動は、住民の生活を類型化するとき一つの指標となる。つまり、「流動型社会」とは経済活動によって得られる貨幣を媒介に生活を成立させる個人の集合である。このように「土着型社会」と「流動型社会」は生活を指標とした類型となり、概念としてとらえることが可能である。

過疎研究の文脈において、都市社会学の言う「分化」「分業」そして人口流出（移動論）の中核は社会的分業の拡大（産業化）の内容としての地域分化と職業構造の分化であり、この議論の中での「移動」は農村から都市への流動のことをさす。社会移動は一般的に、個人の社会的地位、職業構造の移動と考えられている。具体的には個人の就業体系が第一次産業から第二次産業、第三次産業に分化していく現象をさす。これは、生活と生産が一体となっ

た形態が雇用というかたちで産業が生活から切り離され「分化」していく過程である。この「分化」が進むと、それまで家族が生活および産業の単位であった状況が変わり、将来選択が個人にゆだねられることになる。この選択肢の出現が個人化（「生活の個人化」）といわれるものである。

しかし、社会の分化が進めば生活は多様になった。流動型の生活の移動が必ずしも地理的・空間的な移動に限定されない時代となり、移動と定住の関係は複雑さを増している。例えば、インターネットを使った経済活動は、定住していても移動していても職業としては同じである。分化した社会における移動は土着型社会の集団的選択とは異なり、個人の選択によるもので、その選択は多様である。地域社会の変化は農耕社会から貨幣社会へ、という階層の移動にとどまらず（階層の移動に傾斜している社会を「階層流動型」ともいう）、地域間移動に傾向している「地域流動型社会」など、地域レベル、さらには生活レベルに視座を据えることが重要である [三浦典子, 『流動型社会の研究』, 1991年](Figure 2-3 参照)。



※流動型社会論は、行ってみればどうしてこの赤い線が発生するのかを人と彼らの生活を主眼におき論じている。

Figure 2-3 流動型社会論の理解図

生活構造の具体的な指標

さて、ここまでの議論でたびたび出てくる「生活構造」とは、社会学上いかなる概念なのだろうか。三浦（1984年）によると、「集団参与や社会関係の総体を通して、生活主体が階層構造と地域構造へと、すなわち社会構造へ関与する様式」と述べている。つまり、「生活構造」とは生活主体が社会の構造的な部分（たとえば居住、労働、意思決定）に個人の判断によって主体的に関わる様子、様式のことをさす。個人の地域への参加は個人がその地域においてどのような階層におりどのような移動と生活を経験してきたかが大きく反映されるため、「生活構造」を把握することで地域社会を住民の生活面から分析することが可能である。

「生活構造」の分析は、三浦（1991年）によれば、以下の3点の局面で把握されるという。三浦は、下記の3つの局面が前述の日本社会あるいは地域社会における生活指標による評価と密接に関係していると述べている。

- (1) 生活主体が社会構造へ関与する接点、階層的 position を地域的位置でもって示される生活空間
- (2) 生活空間における様々な種類の社会関係の量と質によって示される、社会的な生活の構造
- (3) 生活主体の生活意識による生活空間の生活構造の評価

参照 [三浦典子, 『流動型社会の研究』, 1991 年]

「生活構造の評価」とは、具体的にどのような指標のもと行われるのだろうか。たとえば厚生労働省の国民生活基礎調査では以下のような調査事項がある。

【国民生活基礎調査 調査項目】(厚生労働省)

①世帯(単独世帯の状況、家計支出総額、世帯主との続柄、性、出生年月日、配偶者の有無、医療保険の加入状況、公的年金・恩給の受給状況、公的年金の加入状況、就業状況等)、②健康(自覚症状、通院、日常生活への影響、健康意識、悩みやストレスの状況、こころの状態、県境診断等の受診状況)、③介護(介護が必要な者の性別と生年月日、要介護の状況、介護が必要となった原因、居宅サービスの利用状況、主に介護する者の介護時間、家族と事業主による介護内容)、④所得(前年1年間の所得の種類別金額・課税等の状況、生活意識の状況)、⑤貯蓄(貯蓄現在高、借入金残高)¹

また、まちづくりの文脈において提唱された「村格・都市格」²に含まれる、住民の地域づくりにおける指標は、地域社会が住民生活にいかに関与しているかを図るうえで興味深い。指標は12つに分類されている。

【住民の地域活動推進の視点からのプロセス指標(「村格・都市格」プロセス指標)】(国土交通省)

①自然(豊かな自然、多様な生態系、美しい景観、自然教育、自然体験)、②環境(エコライフ、もったいない文化、省資源・省エネルギー、美化・緑化・修景、独自の制度)、③伝統・文化(伝統行事・祭事、伝統芸能・工芸、道徳・規範・慣習、生活様式、文化創造・交流)、④生涯学習(郷土学、まちづくり学習、徳育活動、農業・体験教育、教養文化活動)、⑤健康長寿(食育・食生活改善、健康づくり活動、支え合い、介護予防、生涯居住)、⑥住民自治(住民グループ、女性の活躍、子育て・介護支援、安心安全、まちづくり組織)、⑦歴史・遺産(史跡・遺跡、文化財・寺社仏閣、歴史的な事象・人物、伝統行事・祭事、伝統継承活動)、⑧景観(伝統的建物、美しい街並み、街なかの自然、人々の交流広場、歩行者空間)、⑨名産・名品(良質な農林水産物、伝統的な製品、独自の技術、伝統料理・食文化、名人・名店)、⑩観光・交流(滞在型観光、案内と情報、観光ボランティア、地域交流、国際交流)、⑪経済活力(農林漁業、地域資源活用、地場産業・商店街、起業家育成、産学官

連携)、⑫行政経営(首長の理念・政策、情報共有化、住民参加・協働、独自の施策・事業、健全な財政運営)³。

いずれの指標にも個人の生活状況(内部的要素)と社会の構造(外部的要素)が混在している。

地域の様相を人々の生活から分析するとき、上記のような分析軸を持つことが可能だとわかった。住民の意識は社会の体制を反映していることが多く、生活構造の分析は社会の構造を分析する手がかりにもなる。

2-3 混住化社会研究の課題と展開

ここで、都市や農村の枠組みのとりわれず住民の生活構造の把握をするうえで重要な概念を紹介したい。本来、「都市」と「農村」を明確に分けることは困難であり、都市の機能を備えた農村も存在すれば、都市経済圏の中に入りながらも多くの住民生活が土着型である地域、あるいは、土着型生活者と流動型生活者が混住している地域も存在する。そのような地域を「マージナルエリア」(混住化地域)と呼ぶことがある。

「混住化地域」は、二宮ら(1985年)によれば、「従来主として農家のみによって構成されていた農村村落が、非農家が流入してきたことによって変貌を遂げ、新しいタイプの地域社会として性格づけられることを余儀なくされた社会」[二宮, 1985年, pp.8]と定義づけられる。まさに、都市でもなく農村でもない、「新しい地域社会」として位置づけられるようになった。徳野(2008年)によると、この「混住化」は農村住民が都市へ流れ込む、「農村の都市化(=異質化)」ととらえられており、「兼業化や離農という農家自体の変化」と「都市住民の流入による非農家の増大」[徳野, 2008年, pp.168-169]の2つの側面で深化したとされている。

混住化の系譜からも明確なように、この混住化の概念は農村から都市への移動の過程で生じる現象を示すものである。序章でもふれたとおり、社会学者の鈴木栄太郎は結節点にあたる地方都市がこの「混在化社会」であると指摘している⁴。

ところが、現代の中山間過疎地は、前述のように多様化している。「混住化」の概念を踏まえると、中山間地域における外部との接点は、「混住化社会」と理解されてもよいかもしれない。しかし、「混住化社会」が都市と農村のマージナルエリア(都市住民と農村住民がまじりあう地域)なのであれば、それは都市と農村の中間地点となるわけであり、都市から地理的にも概念的にも最も離れている中山間地域に「混住化」はあり得るのだろうか。また、そのようにして生まれる混住化社会はこれまでのマージナルエリアと全く異なる形相を描くのであろうか。

次章では長野県木島平村糠千区を事例とし、住民の生活構造を明らかにする中でこれらを具体的に論じていく。

-
- 1 「国民生活基礎調査」厚生労働省 <<http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/20-21.html>> (2013年11月28日最終閲覧)
 - 2 「村格・都市格」は、コミュニティの個性を表す概念である。これを榛村(2007)は「徳」とも考えており、つまりコミュニティの住民が「暮らしや文化の豊かさや誇りを感じる」「個性」ととらえることができる。

「村格・都市格」は見た目の通り2つの概念の組み合わせである。「村格」は「伝統的地域の共同体が長年培ってきた地域特有の文化、環境、道徳、自治、相序の豊かさ」、つまり「自然との共生、健康長寿、安心安全、信頼関係、侍従自足、助け合い」という「人間性豊かな暮らしが営まれる」地域社会のことを指す(国土交通省・上越市、2008年)。

一方「都市格」は、「地域住民が誇りをもち、他地域の人々から尊重され、憧れを持たれるような都市の文化性、公共性、創造性の豊かさ」と定義されている。これを「村格」と同様言いかえるならば、「奥行き深い伝統文化、人々を惹きつける磁場力、多様な文化と発信力」という求心力が指摘できる(国土交通省・上越市、2008年)。
 - 3 [国土交通省、新潟県上越市、2008年]第4章より引用。
 - 4 徳野貞雄「現代農山村の内部構造と混在化社会」『地域社会学の現在』第2章(鈴木広監修、2002年)を参照。

第3章 中山間地域の現状と地域社会の対応—長野県木島平村糠千地区

「過疎」はしばしば、解決すべき問題として語られる。住民の生活の質と水準を蝕む病理として認識されることもあれば、機能を失った集落の公共性について問われ、維持すべきか否かという政策的な文脈で議論されることもある。しかし、いずれの議論も「過疎」という現象から派生し表面化した問題を拾い上げているために、「過疎」を語るそれぞれの立場によって根本的な認識に齟齬があるがあり、議論がすれ違うことが多い。そもそも我々は、地域社会が直面する「過疎」をいかに理解すべきなのだろうか。第1章では過疎化の現状を述べ、その概念の定義について論じたうえで、特に中山間地域の過疎の多様化について触れた。続いて第2章では農村社会学や都市社会学の系譜から過疎がどのように論じられてきたのかについてまとめ、最後には加えて分析の方向性として流動型社会論の生活構造分析についてふれた。

本章では中山間地域の事例として長野県木島平村糠千区をとりあげる。糠千区は、国が定める「過疎地域」の典型例である。一方で積極的に外部者と交流を進めるという強い地域性を持っている。糠千区のこのような動きは、どのように形成されているのだろうか。本章では糠千区の生活構造と現状が意味するところを明らかにすることで、地域社会が直面する「過疎」をいかに理解できるのかについて論じていく。

3-1 長野県木島平村糠千区とは

自然の中で生きる人々—糠千集落（糠千区）

中山間地域の日々の生活といえば、何を思い浮かべるだろうか。長野県木島平村糠千区はブナの国有林に続く山岳地帯の中腹に位置する集落である。人口は108（15歳未満9.3%、15歳～65歳58.3%、65歳以上32.4%）人（2012年度の住民基本台帳より）。比較的規模の小さな集落である。

糠千区の居住空間は木島平村の中でも「異質」といってよい。米どころの木島平村はどこからでもたいてい水田を眺めることができるのだが、糠千区にはそれがない。見渡す限り、山、（流れの激しい）川、（小さな）畑である。区内にはスーパーはもちろん、コンビニエンスストアもない（村内にコンビニエンスストアは一つだけである）。

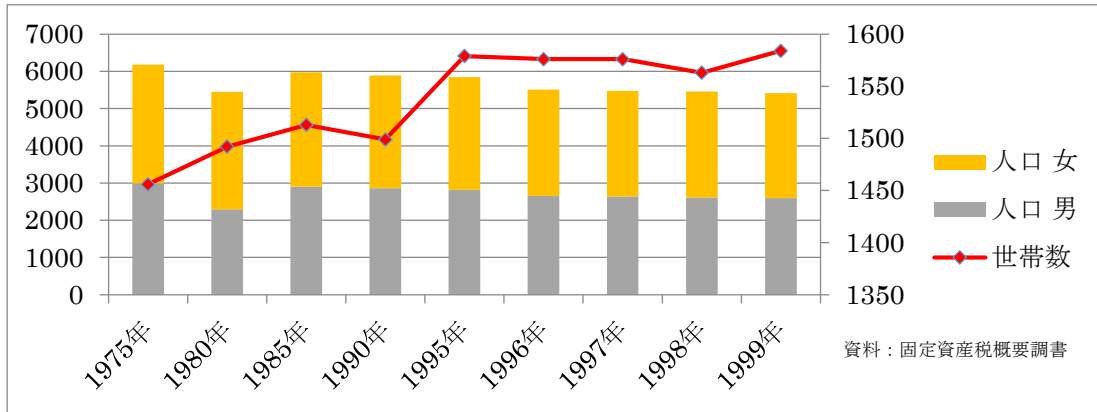
「農村文明」の村、木島平村と糠千区

糠千区を保有する長野県木島平村は、長野県の県庁所在地である長野市から東北へ約40km離れた場所に位置している。面積は99.3平方キロメートルであり、その約8割が山林で構成されている。三方を山で囲まれており、千曲川に接したなだらかな扇状地で標高は320m～750mと土地には高低差がある。内陸性の気候で平均気温は11度、寒暖の差が激しい地域である。豪雪地帯（積雪は1.5～2.0m）という特徴からスキー場としても有名である。

木島平村は、1955年に旧穂高村、住郷村、上木島平村の3村が合併¹して誕生した。合併

当時は8,400人いた人口も、今は4,942人（国税調査、2010年）まで減少している。高齢化率は32.2%で、全国平均22.1%、長野県平均の25.5%を大きく上回っている（Table 3-1参照）。

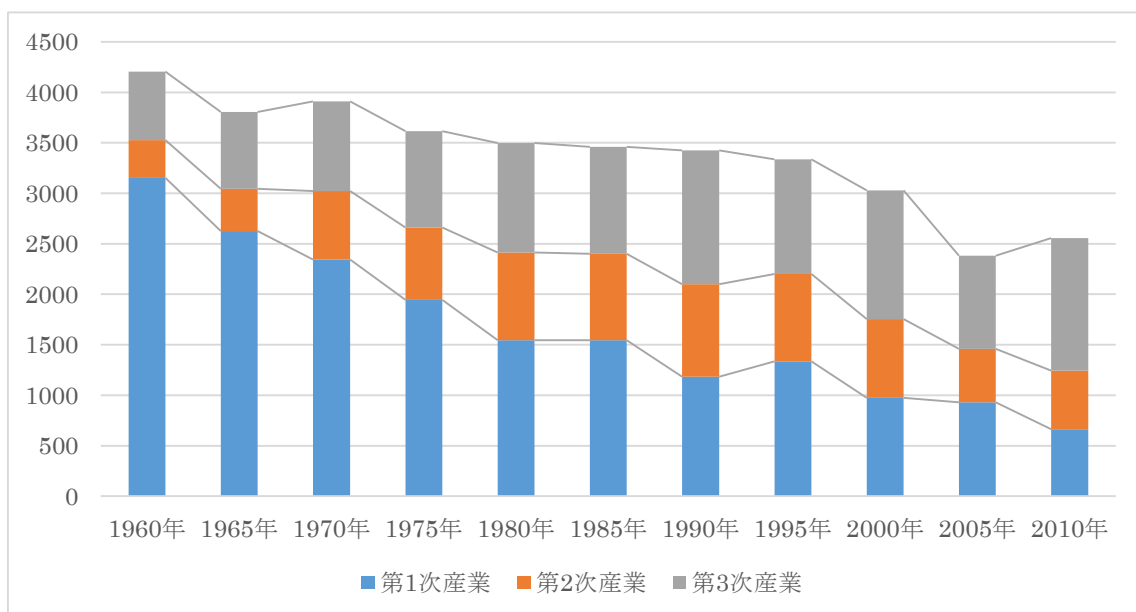
Table 3-1 木島平村の人口と世帯数の推移



以下に示すのは、産業別人口動向の実質数の推移（Table 3-2）と、総農家数、専業農家数、兼業農家数の変遷を示した表（Table 3-3）である。

木島平村全体を通して、人口の減少に伴い産業人口自体が減少していることが分かる。特に第1次産業に従事する人口の減少は目覚ましい。高度経済成長期の1960年～1980年の間に近代化が進み、大型機械の導入や量産の傾向が影響したことで、農家は急激な変化を経験した。農業の生産効率は向上したものの、経営規模が小さく後継者が不足するという状況が続いている。手入れできなくなり農地手放してしまうことも多く、耕作放棄地も増加の傾向にある。

Table 3-2 産業別人口の動向①



注) 国勢調査を参照

Table 3-3 木島平村における総農家数、専業農家数、兼業農家数の変遷

		総農家数			専業農家	兼業農家		
			販売農家	自給的農家			1種	2種
1985年	木島平村	1082	901	181	172	828	167	507
	往郷村	458	382	76	74	350	74	209
	穂高村	288	235	53	38	215	43	128
	上木島村	336	284	52	60	263	50	170
1990年	木島平村	1036	828	208	188	848	172	676
	往郷村	447	350	97	86	361	76	285
	穂高村	278	215	63	53	225	43	182
	上木島村	311	263	48	49	262	53	209
1995年	木島平村	979	745	234	165	814	195	619
	往郷村	417	316	101	69	348	82	256
	穂高村	259	190	69	43	216	42	174
	上木島村	303	239	64	53	250	61	189
2000年	木島平村	866	632	234	124	508	111	397
	往郷村	345	250	95	54	196	44	152
	穂高村	242	170	72	31	139	38	101
	上木島村	279	212	67	39	173	29	144
2005年	木島平村	783	503	280	116	387	102	285
	往郷村	325	201	124	48	153	40	113
	穂高村	208	141	67	36	105	26	79
	上木島村	250	161	89	32	129	36	93
2010年	木島平村	743	422	321	115	307	60	247
	往郷村	309	166	143	44	122	24	98
	穂高村	203	121	82	35	86	14	72
	上木島村	231	135	96	36	99	22	77

注)

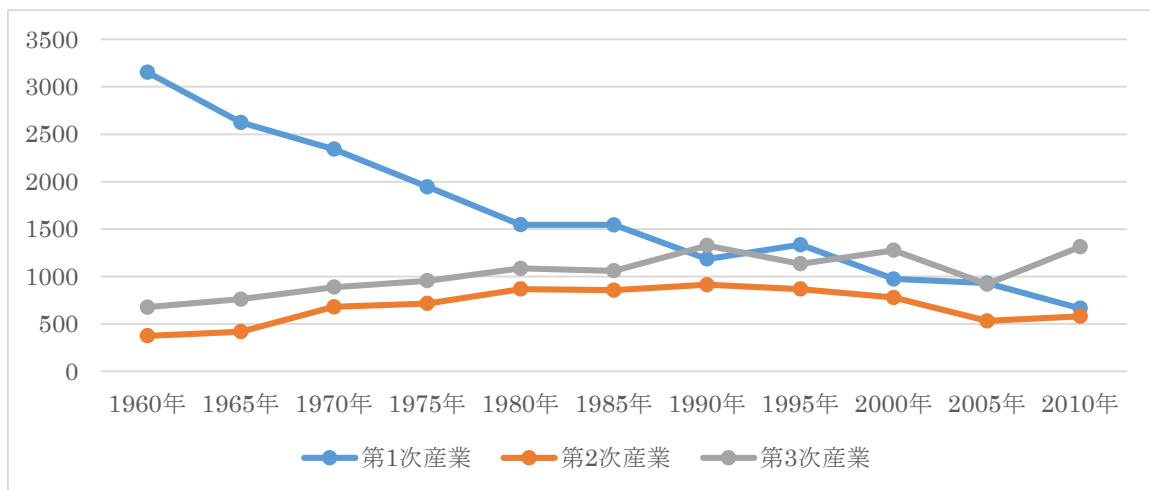
- 1) 大臣官房統計部経営・構造統計課センサス統計室『世界農林業センサス』（農林水産省、1990年、1995年、2000年、2005年、2010年）を参照。
- 2) 「農家」とは、経営耕地面積が10アール以上又は農産物販売金額が15万円以上の世帯をいう。
- 3) 「販売農家」とは、経営耕地面積が30アール以上又は農産物販売金額が50万円以上の農家をいう。
- 4) 「自給的農家」とは、経営耕地面積30a未滿かつ農産物販売金額が年間50万円未滿の農家をいう。

- 5) 「専業農家」とは、世帯員のなかに兼業従事者が1人もいない農家をいう。
- 6) 「兼業農家」とは、世帯員のなかに兼業従事者が1人以上いる農家をいう。
- 7) 「第1種兼業農家」とは、農業所得を主とする兼業農家をいう。
- 8) 「第2種兼業農家」とは、農業所得を従とする兼業農家をいう。

(2～8は大臣官房統計部経営・構造統計課センサス統計室『世界農林業センサス 2010』より引用。)

木島平村における第一次産業以外の産業といえば、前述のように、その特徴でもある「自然」を特徴としたとしたレジャー施設が発達している。村内には豪雪地帯であることをいかし、ゲレンデ施設も備わっている。したがって、第3次産業、サービス産業従事者の割合が比較的高くなっている (Table 3-4 参照)。1990年代には年間60万人の観光客でにぎわった。しかし、2000年以降不況とスキー離れの影響で観光客は減少し、現在年間30万人程度とピーク時より半減している。

Table 3-4 産業別人口の動向



注) 国勢調査を参照。

上記の基礎情報でも明らかになったように、木島平村は土と暮らしが一体となって形成されている村である。さらに、地目別の面積では8割を占める山林の次に、田の面積が広く、米作りを基軸とした農村ということも可能である。

さて、そんな木島平村の行政区内に位置していながらも、糠千区は地理的に木島平村の平野部からは独立した地域である。むしろ糠千区に近いのは隣村の山ノ内町である。旧千ノ平と山ノ内町は隣接しており、現在でも車で5分とかからない。以前は糠千と山ノ内の間で婚礼が行われることも多かった。糠千区は特に冬季は雪で閉ざされてしまい、産業的にも文化的にも平野部との特異性が際立つ。中山間地域に位置することが「他の集落に負けたくない」という自負と結束力を生んでおり、独特な風俗(文化、習慣)を伝統的に維持している。

同時に、地理的に厳しい環境である中山間地域では一般的に産業面、生活面で基盤が弱い弱であり、農村のみならず都市を含むマクロな社会変動（たとえば資本化や近代化）の影響を受けやすい。Table1-4 と Table1-5 はその象徴的なデータとなっている。木島平村と比べて糠千区は人口流出の時期も、そのスピードも早い。木島平村の中でもいち早く近代化の影響を受けていたことが分かる。糠千区にとって（住民の意識とはかけ離れた部分を含め）都市化はすでに 1960 年から直面していた現象であり、その意味で糠千区は都市との関係性を無視できなくなっているのである。

現代において、都市と農村の関係が無視できなくなっているのは何も糠千区だけの話ではない。より多くの市町村、集落が過疎や過密に直面し、都市と農村の関係を再考し始めている。木島平村自体も 2008 年前後から農村と都市の良好な関係の構築から地域づくりを進めよう村政の中に交流事業を取り入れ始めた。村政が目指す地域づくりには、「村格・都市格形成」という言葉が盛り込まれている [木島平農村交流型産業推進協議会, 2010 年]。「村格・都市格」という考え方は、農村の価値をあらためて評価し、都市と農村の間にある諸課題を解決しようとする国家的な試みの一つである。「村格・都市格」は 2008 年から国土交通省が本格的に導入を始めた概念で、地域の内的なイノベーション(変革)の醸成と同時に、外部との接触を行うことで地域の「強み」を確立し、活性化していこうという取り組みの一環である。「村格・都市格」形成のプロセスはすなわち住民主体の地域コミュニティづくりであり、全国のコミュニティ、そして都市と農村を繋ぐネットワークの過程でもある。その評価基準や体制の理論は整っているものの、一方で、実践的な研究が行われておらず、実現可能性や実現への課題の分析も未だ行われていない。

糠千区の地域形成に地域の独自性を保とうとしながらも都市との関係性を意識的に構築しようとする動きが加わった背景には、この「村格・都市格形成」の村政が大きく影響している。以下では糠千区の地域形成と村政の関係や影響力について論じていくが、その前に、村政そのものの動きをもう少し詳しく述べておくことにしよう。

Figure 3-1 長野県全図



[長野県木島平村「農村文明塾」編集・発行, 2012年]

地域づくりにおける木島平村行政の基本方針

日本において、まちづくりと行政の政策は密接に関わってきた系譜があるが²、それは木

島平村においても例外ではなく、時にまちづくりをリードし、時に住民自治を支援する役割を担っている。そういった意味で、木島平村における行政は、一担い手として比重の大きい重要な立場に位置付けられている。

現在の木島平村のまちづくりは、2000年前後から構想が練られていた「農を基軸とする交流のまちづくり」を基軸に進められている。これらの取り組みは木島平村農村交流型産業推進協議会（2008年）³の計画の中に整理されている。この計画の中で重点が置かれているのが、文化や歴史、美しい自然と農村景観、生産される農産物、農村の持つ教育力、地域を担う人材、など、「村の資源」である。これらの有機的な結びつきによって、地域の誇りを醸成することが木島平村のまちづくりであると述べられている。木島平村は、米作りを基盤に集落が形成され、住民によるコミュニティ自治が行われてきた。コミュニティの中では自然と共生して農耕生活が営まれ、長年をかけて農村文化と歴史が育まれてきた。

『農村文明』創生プログラムと「農村文明塾」の創設

この「村の資源」を活かし地域を形成していくために、2008年から木島平村は「農村文明」を提唱し、農村の文化や伝統を、農村、都市の住民の交流によって活性化する取り組みを始めた。この取り組みは、「豊富な農村資源と農産物としての可能性を活かしつつ、直面する課題を克服するために、全国に先駆けて取り組んだ『有機の里』づくりをさらに発展、深化させる形で、『農』を基軸にした様々な取り組みを意欲的に進め、『農村文明』の提唱と全国運動の展開に至った」【木島平農村交流型産業推進協議会, 2008年】とされている。「村格・都市格」の形成は、農村の価値と機能（「国土全体からみた多面的機能」、「価値観・ライフスタイル」、「コミュニティ力・地域の内発力」、「持続可能な経済活力」【木島平農村交流型産業推進協議会, 2010年】）を再構築・向上するものだとし、それが「農村文明」の創生のために必要な活動だと位置づけた。

「第5次総合振興計画」（2005年～2014年）を推進するために組織された農村交流型産業推進協議会が主に審議の中心となり、打ち出したのが「『農村文明』創生プログラム」である。官民一体となって取り組むために、「農村文明づくり～『農村文明』創生に向けた村格形成のむらづくり～」を戦略ビジョンとして位置づけている。「『農村文明』創生プログラム」では、農村文明の里づくりを実現するため、「村格・都市格」形成を促進する取り組みが組み込まれている。プログラムは、「①選択定住と農村ライフスタイルの促進」、「②農都連携型農業とソーシャルビジネスの促進」、「③農村ならではの地産地消の促進」、「④農村の自然環境保全と安心・安全の循環社会づくり」、「⑤農が育む文化の伝承」、「⑥農業・農村に愛着を持つ人づくり」の6つの柱によって展開されている。

例えば、「②農都連携型農業とソーシャルビジネスの促進」においては、地域ブランドの形成と農産物の流通を拡大するプロジェクトがある。このプロジェクトの成果として典型的なものは、「木島平米」は代表的な地域ブランドである。木島平村はこのブランディング力をさらに強めるために、2012年に国内最大の米の品評会である「米・食味分析鑑定コン

クール：国際大会」を村に誘致した。審査の結果、木島平米は「国際 総合部門」で金賞など成果も修めた。「厳選木島平米『村長の太鼓判』『合格木島平米』など、一定の品質基準を満たした米にはブランドをつけ、販売をさらに促進している。

また、6つの柱を基に、学生インターンシップやセミナー・シンポジウムを開催し、地域外との交流によって価値を高めようという取り組みである。前述の『農村文明塾』はその一例で、「農村版大学コンソーシアム」では都市に住む大学生が地域の暮らしや行事に参加する。『農村文明塾』は今年3年目を迎え、「農村版大学コンソーシアム」の開催も10以上を数える。その主な活動地域に設定されているのが、糠千区なのである。

この交流が糠千区で始まったのは2011年ごろのことである。村の教育員会が中心となって都市住民との交流を『農村文明塾』と命名し事業化したのが2008年、2011年以降はプログラム「農村版大学コンソーシアム」を立ち上げ、大学生をはじめとする都市の住民を地域に積極的に受け入れるようになった。「農村版大学コンソーシアム」では地域の伝統行事やイベント（まつり、イベント等）、農政へ参加し、実体験を持って学ぶプログラム或はワークショップを採用している。

木島平村における中山間地域

さて、ここまで木島平村の村政が目指す都市との関係性と、それに付随する取り組みを述べてきた。しかし、なぜ木島平村は糠千区で『農村文明塾』を行うこととしたのだろうか。それは、前に述べた「糠千区の特異性」との関係が深い。

扇状地という地形が特徴的な木島平村は村の三方が山に面しており、平野部と山間部が入り組んでいる。そのため、木島平村が有している集落は多様である。標高約320m、約100世帯、人口約380人の自治区（中町区）もあれば、標高約700m、約16世帯、人口約60人（馬曲区）もある。自治の仕組み自体は共通しているものの、集落によって社会構造（人口構造と産業構造）が微妙に異なるため自治や文化継承にも微妙な差が生じ、集落ごとの独自性を加速させている。特に中山間地域の住民はその独自性を誇りにする他方、行政サービスの差などを疑問視することもあり、いわゆる意識上の「集落間格差」につながっている。住民はもちろん、行政もこの「集落間格差」を問題視している。「農村文明塾」の取り組みを行政サービスが届きにくい中山間地域の糠千区で積極的に行っているのにはこの「集落間格差」を解消しようという意図も含まれている。

人口約5000の木島平村では、その地形と環境ゆえ豊かな地域性が生まれる。しかしそれが「集落間格差」として課題となる一面もある。3-2ではその集落の形成を理解するために、前述のような特異性を生み出してきた糠千の地域形成について論じていく。

3-2 糠千区のコミュニティ形成

糠千区の生活と産業

これまでの研究で明らかになっているように⁵、農村で特徴的なのがこの「生活」と「産

業」の関係であり、その境界は極めてあいまいであるというのが一般的な見解である。しかし中山間地域ではその形態が早くから崩壊しており、生活圏外に仕事を持っていることが全く珍しくない。糠千区においても、今は姿を消した専業農家も戦前からその数自体が少なく、夏は蚕・製糸業、林業、そして冬は炭焼きと内職（草履や合羽づくり）が中心であった。山ノ内や村内平野部に加工品を生産者自ら売りにいくこともあったが、特に冬季はそれもままならず、卸売業者へ委託していたとのことである。1960年前後から自動車での移動が可能になったことから、移動の幅が広がり、糠千区に家を持ちながらも進学や就職のために集落の外に出る若者や労働者が増えていった。

自給農家が存在する糠千では、一見土着生活が定着しているようにみえる。しかし、この生活と経済活動の分離状態は高度経済成長期初期段階から、いや、もっと前から続いていたのかもしれない。

土着型生活が定着している地域コミュニティでは、地域住民の暮らしを守るためのルールや地域を秩序づける規範性の維持と、生産活動を含めた住民生活が表裏一体であるため、地域に強い結束を保つことが可能である。生活の個人化（＝社会化）が早くから始まっていたこの糠千区は、それでは、いかにして地域の規範性を維持し、住民生活を構築してきたのだろうか。

Figure 3-2 糠千区地形図



糠千区における規範性の形成

糠千区のコミュニティ形成のうえで重要な役割をはたしているのが①伝統的な行事と②組織化された自治活動である⁶。インタビュー（2013年11月23日）によれば、これらの地域活動は長い間地域の結束力を維持し、ある種の規範性を生み出してきたという。社会学の概念を用いるとすれば、これらの取り組みは地域に存在する公共財を自ら選択し活用していく過程、いわゆる「社会資源」と「社会財」とする取り組みであり、住民個人が地域の中で豊かさを形成する場所となっている⁷。

以下に、伝統的な行事を1年間のスケジュールに沿って提示する（糠千区『年間スケジュール』⁸を参照）。

①伝統的な行事

糠千区のコミュニティ形成上重要な行事として、年間を通して以下のようなものがある。

- 1月：道祖神（12日）
- 2月：雪かき作業
- 5月：春祭り（5日）、そば祭り（8日）
- 6月：消防団ポンプ操法大会（23日）
- 8月：夏祭り（14日）
- 9月：秋祭り（神楽（夜宮）：14日、15日）
- 10月：村民運動会（13日）、村民祭り（26日）
- 11月：糠千区文化祭（3日）、道祖神づくり（17日）
- 12月：しめ縄づくり

事例：道祖神

「道祖神」は一般的に上越・信州で旅の安全を祈念するものとして信仰されており、のちに「悪霊退治」「安産」「健康」の意味が派生した。多くは路肩や角に男女の石仏として設置されているが、木島平村では、住民の手で毎年道祖神をつくり、小正月に燃やすことが伝統である。秋になると集落に一つ、大きな道祖神が出来上がる。大きさやデザインは集落によってさまざまであるが、5~7メートルの高さの櫓を組み、そこに杉の枝と藁を刺していく。この道祖神には子どもの健やかな成長が祈念され、今でも制作は集落ごとの「育成会」（子ども会）が担っている。その理由は諸説あるが、道祖神を燃やすまでの間、子どもたちが道祖神の周辺を巡回し守るといった習慣があり、この儀式が終わると大きく成長するからである。

子どもが総人口の10%を切っている糠千区では育成会だけではなく住民が総出で道祖神をつくる。杉の伐採を含めると準備には数日を要し、重労働も重なる作業である。しかし、糠千の結束力は強く、毎年村内でも珍しい高さそして美しさの道祖神をつくりあげる。コンソーシアムを通し、（2013年現在）2年にわたってこの道祖神づくりに学生や地域おこし協

力隊隊員⁹が参加している。

事例：村民運動会

木島平村全区を対象に1年に1度村民運動会が執り行われる。約1200人が参加する大規模な取り組みである。運動会は10代、20代、30代、40代、50代といったように世代ごとに参加種目が決められており、住民は自分の年齢とそれより若い世代の所定種目に出場することができる。種目には「ムカデリレー」、「早さが売り物」（区の消防団員が団服の早着替えをする種目）、「運が良ければ」（ペットボトル運びなど障害物が記載されている全5種のカードから一枚を選び、所定にしたがってグラウンドの半周を走る種目）、「都会の住宅事情」（椅子取りゲーム）などがある。

区民が総出で取り組む行事で、世代を超えた交流の場となっている。運動会を終えるとそれぞれの区に設置されている公民館へ戻り、飲み会が開かれるのが習慣である。

ただし、木島平村26区（+スキー場）のうち出場は18区と、人手不足など様々な理由で出場を見送っている地区もある。糠千区も同様で、8年間出場を見送っていたが、2013年にはリピーターの大学生の参加が認められ、出場がかなった。運動会には様々な世代の区民が参加した。

傾向：行事と交流

これらの行事は、それぞれ開催回数や年数は違ったとしても伝統的なものばかりであるが、近年ではこれらに大学生の参加がみられる。加えて、「集落カフェ」（女性高齢者が各家に集まって開くお茶会を、集落全体で開こうとする取り組みで、早稲田大学社会科学部の宮内教授が提唱した）といった新しい取り組みもある。

これら交流の取り組みは、たとえある個人にとって「都市の学生が来るから（仕方がないから）参加しよう」といった動機であったとしても、結果的に交流が行事を継承する一つの契機となっている¹⁰。

行事の継承は糠千区の住民の結束力を高めるものとなっている。そして、都市住民（大学生）との継続的な交流が住民の地域参加を一部促しているのである。

②組織化された自治活動

糠千区の自治は原則として区長を含む32の職務（区長、副区長、会計、総務部長、土木部長、農・林野部長、自治会長、行員間分館長、主事、社協支部長、体育部長、監査委員、農協総代、のうさい担当、同和教育指導員、統計調査委員、氏子総代表、氏子総代、神楽保存会長、保存会会計、農業委員、民生・児童委員、消防班長、老人クラブ長、老人クラブ会計、財管委員、保険補導委員、防犯指導員、育成会支部長、安協婦人部、婦人会長、婦人会副会長）によって担われており、その職務を39人（2013年現在）が担っている。

住民の選挙で選ばれるのは副区長、会計、主事、監査委員で、次期区長には副区長が就任、

その後区長は参与となるのが慣例である。区内では、これらの役職は持ち回りという認識があり、1世帯・1世代が十数年を周期に数回なんらかの役職を担当する。これらの組織はそれぞれの世代や性別に準拠して十分機能しており、部会の開催頻度はさまざまであるものの、生活課題の解決の一助となっている。

事例：消防団

例えば消防団の取り組みは、住民の相互扶助の象徴である。木島平村からもっとも近い消防署は飯山市であり、消防車が到着するまでほうっておいては火の手が回ってしまう。そこで糠千に限らず木島平村全体で消防団の制度を設けている。これは集落の若者が消防団員を担うというものである。現在は集落ごとの訓練が困難な地域は「群」で区分されている。訓練は年に1回6月から開催されるポンプ操法大会に合わせて行われる。秋の村民運動会では消防団員による早き着替えの競技が、冬には夜警が実施されるなど、年間通して活動する。この取り組みは若者のコミュニティの場ともなっており、また、集落を超えた村全体のネットワークともなっている。

傾向①：慣例化

自治組織においては、住民の中に暗黙の了解が蓄積されており、慣例化が進んでいるといえる。また、兼任、住民によっては複数回同じ係を担当したことがあるなど経験も蓄積されている。運営体以外の組織は性別や年齢で仕切られていることが多いため、加入上あまり迷うこともない。活動も定期的である。

傾向②：住民意識の変化

しかし一方で、組織に対する住民の意識は2010年以降の外部者（都市住民）との交流で確実に変化している。例えば、「清流の郷委員会」は大学と連携を組み学生と交流するために2013年に新たに設置された組織である。糠千区の伝統文化や産業を保存しようと1990年代にスタートした「ものずき会」（有志）ではなく、糠千区全体で学生を受け入れようという意識から組織化が決まった。糠千区は金沢大学の地域連携推進センター¹¹と地学連携協定を結んだ。他にも早稲田大学の社会連携推進室¹²と連携事業を行っている。

つまり、「慣例」によって地域の秩序（日常がつくり出されて、住民生活が安定している状態）と規範性（ルールなどによって秩序化されている状態）が保たれてきた一方で、外部者の受け入れを選択的に行い、さらに地域の中で秩序化しようという動き（それを受け入れ、安定した生活の中に組み込もうとする行動）と決定が生まれているのである。

まとめ

3-2では地域の規範性を形成する行事と自治組織という二つの側面から論じた。この側面にはそれぞれ、伝統的な維持手段と慣例が常に付随していた。一方で、特に近年は外部者へ

の開放性をも同時にはらんでおり、それがそれぞれの場面で住民の意識と行動を変化に一役かっている。

外部者に地域を一部開放する際に経験する無秩序な状態で地域の規範性を保つには、ある種大きなエネルギーを必要とする。そのエネルギーは、慣例を辞さない自治組織に変革をもたらすまでになっている。特異性の方向は紛れもなく深化に向かっているのである。

3-3 糠千区の住民と生活

さて、一方で、地域の文脈と同時に地域を形成しているのが個人であることを忘れてはならない。特に糠千区においては、3-2の冒頭で述べたように、生活の個人化がいち早く進んだ地域でもある。地域と個人とのかかわりは、地域形成にとって切っても切り離せない。

個人の地域への関わりは、個人の主体的な判断のみに依存するだけではなく、社会の構造の変化が影響を及ぼす。つまり、生活構造には、住民個人の意思決定による選択（これを生活構造の「主体的側面」と呼ぶ）と社会の構造による変化（これを生活構造の「構造的側面」と呼ぶ）の2つの側面があるのである【山本努、徳野貞雄、加来和典、高野和良, 1998年】。

そこで本節では【個人の変化】に分析を加え、社会の構造的変化が地域に与える影響を明らかにする。さらに、世代の過ごし方が時期時代によっていかに変化しているかを考察するために、本節では15歳までの子どもの生活と成長に着目し、【子ども世代の変化】を論じていく。2つの変化を明らかにすることでよりリアルな生活構造の把握を目指す。

【個人の変化】体験談より

糠千区の住民は平野部とは異なり、米作りや畑で生計を立てる世帯はほとんどない。その生活はこの数十年の間で大きく変わったという。その構造的側面が反映されている体験談がある。

体験談：Aさん（仮名）（男性）

糠千区に住む64歳のAさんは糠千区に生まれ、糠千区に育った。Aさんは小学校3年生までは糠塚分校に通い、4年生以降を南部小学校で過ごしている。小学生のときは「櫻少年団」というグループに入っていた。櫻少年団の先輩には勉強や泳ぎ方を教えてもらい、川で一緒に遊んだ。中学校に入学すると、冬季は糠千区が雪で閉ざされてしまうため、木島平中学校の寄宿舎に入り勉強した。高校で勉強していたころ、ちょうど道路が整備されて、車で平野部を行き来することができるようになった。一度東京に出てみたが、1~2年で仕事を辞め、糠千に帰ってきた。その時、隣町の公務員になった。友人は何人か長野や東京に出て行ったままになっている。自分の弟も東京で就職して、今も神奈川県に住んでいる。

そうしている間に、子どもが少なくなり、櫻少年団が解散になってしまった。次いで分校も南部小学校と統合された。働きに出ている間にもいろいろなことがあった。例えば、長野で長野五輪が行われた。そのときは、ボランティアとして参加した。自給自足の生活も続い

ていたが、交通の便がよくなり、平野部で簡単に手に入るものはあえて自分たちでつくる必要がなくなってしまった。炭焼きも質はいいが量とれないため、産業として成り立たなくなり、自然と消えていってしまった。分校跡地には精密工場が建てられた。数年前にこの工場も撤退し、分館（公民館）が立った。

公務員を定年退職してからは、糠千区の区長や分館の館長を務める傍らスキー場の経営にも携わるようになった。櫻少年団の団歌は忘れないように、区民が集まるときには歌うようにしている。炭焼きの文化も残したいという仲間が多かったため、糠千の住民たちと「ものずき会」をはじめた。「もの好き会」では、炭焼きの他にも今ではそば打ちも取り入れている。そば打ちの資格も取得した。最近では大学生とも積極的に交流するようになっている。
(2013年10月～11月聞き取り)

Aさんは、主体的に糠千区に住み、糠千区に関わっていることが分かるが、彼の就業・就学、そしてそれにまつわる生活は社会の構造から大きな影響を受けていることが分かる。特に高度経済成長期における機械化（インフラ整備、自動車の導入、産業化）がそのまま生活の基盤に反映されている事例である。

【個人の変化】 社会化された中山間地域

Aさんの体験談から、以下の2点に着目したい。第一に、糠千の住民の生活は土着型の生活に依存しておらず、集落の外で就学し農業以外の就労についていることが多い点である。都市社会学者の「農村」の定義「農業に従う人々を主体とする地域社会」[福武直, 1976年]とは異なる地域が形成されている。それは「生活における地域社会の存在意義や意味づけが個人によって多様化していく過程」[堤マサエ、徳野貞雄、山本努, 2008年]であり、「生活の個人化」（＝社会化）に位置づけられるのではないだろうか。

第二に、流動の方向性は1960年～1990年代まで確かに<糠千→平野部>あるいは<糠千→DID 地区・都心部>に傾向しているが、現在は必ずしもそうではなく、<平野部→糠千>（地域おこし協力隊、『農村文明塾』職員）、<都心部→糠千>（大学生）という傾向がある、ということである。さらに、糠千への選択的定住という側面も見逃してはならない。

集落の内外での就学、就労が個人化、社会化を反映しているとすれば、それは住民の生活の中でいかなる形で存在するのだろうか。以下では特に就学や子どもの成長に着目する。

【子ども世代の変化】 子どもの成長過程にみる生活と地域の変化¹³

現在、糠千区に居住する子ども（15歳未満）は全部で10%を切っており、その数は一時期の10分の1以下にまで減っている。子どもたちは糠千区に生まれ育った子どもと移り住んできた子どもが混在している状態である。

子どもを育成する組織として前述の「育成会」があり、保育園、小学校、中学校は平野部に位置している。村内には県立の高校があるが、子どもたちの進学意欲はそれほど高くない

(木島平村外の高校進学意欲の方が比較的強い) 14。

現在、子どもたちの通学には「スクールバス」が用いられている。小学生は往復スクールバスを利用するのが通常で、部活動に参加している中学生は行き便のみを利用することが多い。スクールバスは糠千区だけでなくスキー場や馬曲区を巡り、子どもたちをピックアップする。冬季は凍結で運行が乱れやすいということである。部活動で帰宅が遅くなる中学生はタクシーで家に帰る(村内はバスの定期便が一部に限られているため、リクエストしておけばすぐにタクシーが来てくれる制度がある)。このように通常中学生までは糠千区からの通学が可能である。

この状態は糠千においていくつかの転換期を経て形成されたものである。本稿では村や区の統合に関わらず、教育機関の統廃合に合わせて3つの区分を提示する。はじめの転換期は1920年代。この時代に、他集落との関わり合いの中で、地域の子どもたち50~60人が中心となり「櫻少年団」が結成された。文教場(分校)が開校したのもこの時期である。次に1970年代。文教場が閉鎖され、その数年後に櫻少年団も解散した。そして2000年代、南部小学校の廃校時期である。

1920年~1970年：分校と櫻少年団の設立

糠塚と千ノ平が統合される前の1924年、当時の糠塚に分教場が創設された。当時一学年の生徒数は20人程度で、1~3年生の3学年を収容するには十分な規模だったという。大町(糠千区から4kmほど平野部に下ったところ)の本校(上木島小学校)に通うまでの間、子どもたちは平野部に住む子どもたちが結成していた「少年団」に影響を受け、「櫻少年団」を設立することを決める。

先生方の協力もあり、団歌ができるまでに成長し、その活動は①ボランティア、②活動資金調達、③あそびであり、小学生が清掃、火の用心の喚起、上級生が下級生の世話役を担うなど、相互扶助が自発的に行われていた¹⁵。

現在糠千区の15歳以下の住民は全体の10%以下と少なくなっているが、その絆は強く、小さくあっても「育成会」(子ども会)で地域に見守られながら子どもたちは日々成長している。

櫻少年団で育った青年たちの中には、戦火の中で軍隊に入り出世を果たした方や、高校で糠千区を離れ、農林水産省に入省した方、電気検定に合格し発電所にお勤めになった方などがある。

1970年~2000年：分校の廃校と櫻少年団の解散、少子化

1960年以降の機械化とインフラ開発の影響で、糠千からは急速に子どもが減っていった。くしくも櫻少年団の消防への取り組み(櫻少年団は夜警を積極的に行っていた)が消防庁長官表彰を受けた翌年の1970年、櫻少年団は担い手不足で解散を余儀なくされる。翌年1971年、分校も維持が難しくなり、ついに廃校を迎えた。その後子どもたちは「育成会」という

子ども会の中で育つようになる。以降の糠千区は急激な人口の減少を経験していった。

2000年：南部小学校の廃校

子どもたちは小学校1年生から6年生を南部小学校で学んでいたが、2007年に南部小学校は廃校となり、北部小学校に統合され、木島平小学校となった。

木島平小学校では現在70時間の総合学習の時間を米作りやそばづくりに充てている。平成26年度には小中一貫制度ができ、小学校と中学校が統合する予定である¹⁶。

【子ども世代の変化】地域で育つ子どもたち

糠千区で育つ子どもたちは今も昔も変わらず、地域の中で育つ。しかし、子どもは変わらなくとも地域の環境は時代の影響を大きく受けている。そして、交友範囲・移動範囲という面からみると、子どもたちが育つ地域という「空間」の領域は徐々に糠千区という区分から木島平村に広がっている。しかしこの傾向も、範囲が広がれば広がるほどより個人の選択に依存するようになっている。この個人の選択は、地域の多様性を生み出すものとなっている。

3-4 事例の総括

さて、長野県木島平村と糠千区を、地域の規範性を語りながら、人の成長の過程という切り口を用いて論じた。長野県の中でも限りなく上越に近い木島平村は、村内に電車の停留駅がないなど交通上の制限があり、さらに山の中腹に位置する糠千区においては移動も難しいことだろう。しかし、逆にその制限が糠千区の閉鎖性を生み出し、外部に対して開放性を自主的に求める動きを生んだのかもしれない。そしてその動きは、高度経済成長期を契機とする近代化が発端となったのである。

ここで、今後の議論を進めていくうえで、本章の議論を以下の2つの視点に集約したい。第一に、住民の生活において、彼らの存在意義や意味づけは多様化しており、そういった意味で糠千区では生活の個人化（＝社会化）が進行している、という点である。

これまで、生生活の個人化は以下のような＜農村→都市＞の文脈で説明されていた。

「自給的・相互扶助的な農村生活に代わって、都市的な生活特徴は必要な生活資源を貨幣と引き換えに外部からまかなうことで成り立っている。『生活の個人化』は、さまざまな生活課題が家族内では解決できなくなり、外部の専門サービスの処理されるようになることから起こる」【徳野「混住化と地域社会」『地方からの社会学』2008年、pp.179】

しかし、糠千区は農村の中心に位置していながらも、「必要な生活資源を貨幣と引き換えに外部からまかなっている」側面、つまり「生活の個人化」といういかにも都市的な特徴を有しているのである。

そして第二に、糠千区において人口論的な過疎化は進行しているものの、現代において社

会移動のベクトルは必ずしも農村から都市の一方方向ではないということである。3-2、3-3 で分かったように、都市住民の流入、地域住民の定住化の傾向もあり、多様な担い手によって土着の文化や規範性を保ちながら新たな地域が形成されている。

これら 2 つの視点は糠千の現状を示すものであるが、一方で、これらの視点から我々はいかにして糠千の状況を理解・把握できるのであろうか。そして、今後糠千区における外部者との交流が、いかなる混住地域を形成していき、そしてその混在・混住が地域にどのような意味をもたらすのであろうか。第 4 章では、上記 2 つの視点をを用いながら糠千区の開放性の意味について論じていく。

¹榛村 (2007) は、いたずらな比較と競争を抑えるために村と都市の定義を「直観的指標」を用いるとしていながらも、村の対象は①都市の中の地域、②平成の大合併で小さくまとまった、過疎化で人口が急減した 5 万人未満の村、存残独立を保った町村、とし、都市は③特別区、政令指定都市、中核市、特例市、④中小都市、としている。また、「村格」は②、「都市格」は④の議論であるとしている。木島平村は②に該当する。

²大久保武「地域開発政策と農村の変容」、『地域社会学講座第 3 巻 地域社会の政策とガバナンス』第 1 部第 2 章

³木島平村農村交流型産業推進協議会：木島平村の活性化のために 2008 年に組織化された。

⁴農を基軸とする木島平村の行政サービスは農業やそれに関する雇用、住居住宅に関することが多いため、農業を産業の基軸としない中山間地域へのサービスはどうしても希薄になる。

⁵第 2 章を参照。

⁶糠千区住民へのインタビュー (2013 年 11 月 23 日) より。

⁷「社会資源」とは地域社会に存在するサービスや公共財であり、個人がそれを選択し、生活の一部として利用することで「社会資源」は「社会財」となる。この「社会資源」と「社会財」の考え方は生活構造を把握する際、重要となる。【鈴木広・倉沢進 編著, 1984 年】

⁸糠千区では毎年、年間スケジュールを住民に配布している。

⁹「地域おこし協力隊」とは 2009 年から総務省の事業であり、地方に都市部の人を受け入れ、最大 3 年間の期限として報酬を支払い、家賃などの補助を行う制度である。総務省のアンケートによれば、2011 年の時点で任期を終了した人の 7 割が地域への定住を志望している【矢崎栄司, 2012 年, pp.4】。木島平村はこの地域おこし協力隊を 2008 年から受け入れている。

¹⁰ヒアリングメモ (久保, 2013 年 11 月 23 日) 参照。

¹¹神谷浩夫。金沢大学教授で、人間社会学域で教鞭をとっている。地域連携推進センターと木島平村が連携を始めた当初、同センター長を務めていた。現在も金沢大学と木島平村は継続的な連携関係にあり、特に木島平村は人間社会学域の学生がコースの中で必須となっているインターンシップへの受け入れ先となっている (インターン中の学生は基本的に「農村版コンソーシアム」に参加する)。

¹²早稲田大学とは木島平村の名産物「稲」のもじりにつながりが生まれ、早稲田大学元総長奥島教授と村長が協力者を交えて「農村文明」を生み出した。社会連携推進室はコンソーシアム創設以前から木島平村と「プロフェッショナルワークショップ」というプログラムを開いており、早稲田大学の学生が村で学び、提言を村長へプレゼンテーションするというもので、今でもコンソーシアムとは一線を画している。

¹³ 子どもに関する記述は主に、糠千区櫻少年団団歌碑建立にあたって作成された記念誌『栄光に輝く櫻健児』（2001年）とヒアリングメモを参照している。

¹⁴ 糠千区住民へのインタビュー（2013年10月13日）より。

¹⁵ 外山清水「櫻健児の回想」『栄光に輝く桜健児』（2001年）

¹⁶ 木島平小学校校長の関孝志先生へのインタビュー（2013年11月1日）より。

第4章 糠千区における多様性とその形成過程

第1章で過疎の概念を述べたうえで、第2章では過疎化と社会学を巡る概念の経緯を論じた。その際、「流動型社会」と「混住化社会」の概念にふれ、いずれも生活構造を明らかにする必要性とその分析軸を述べた。そして第3章で長野県木島平村と糠千区の概要を記した。本章では、全章で示した通り、糠千区の中で行われている外部者（都市住民）との交流の糠千区における意味を問う。そして、今後糠千区は外部とどのような関係性を築いていくのか、そしてその関係性の構築は糠千区においてどのような意味を持つのかについて論じていく。

まず、第3章で提示した2つの視点を再掲する。

1) 住民の生活において、彼らの存在意義や意味づけは多様化しており、そういった意味で糠千区では生活の個人化（＝社会化）が進行している。（略）

2) 糠千区において人口論的な過疎化は進行しているものの、現代において社会移動のベクトルは必ずしも農村から都市の一方向ではない。都市住民の流入、地域住民の定住化の傾向もあり、多様な担い手によって土着の文化や規範性を保ちながら新たな地域が形成されている。

（第2章より抜粋）

ここで、第3章で示された視点をより深く考えるために、2つの分析軸を提示したい。

第一に、時間軸である。これは、それぞれの変化が始まった時期と変化の期間をさす。時間に主軸をおくと、上記の視点が、過去・現在・未来の中で語られることとなる。1点目において、糠千区の住民がかつての土着生産（炭焼きや手工芸品生産）を離れはじめたのは高度経済成長期のことである。そして、この生産構造の変化によって、糠千区の住民には生活の中で個人自らが選択しなければならない機会が増えていった。そういった意味で、「生活の個人化」は当初から現在まで断続的に深化している。しかし、2点目に提示した人口流動のベクトルが多様化した話しは少なからずここ数年（特に2010年糠千区が木島平村の『農村文明塾』のフィールドとなった以降）で起こっている。

そして第二に、意思決定の質的な軸である。それぞれが人に人の動きが関係するのであれば、行動を決定する要因が意思決定に現れているはずである。この意思決定の質的な側面としては、構造的側面と主体的側面が想定される[山本, 1998年]。高度経済成長期に起こった住民生活の変化は社会的な構造によるところが大きい。社会の変化が住民の生活を変えていく様相、あるいは意志とは異なるところで決定がくだされ、住民生活の変化や移動が引き起こされていた。一方で現代に起こっている人口流動の方向性の変化は個人の選択によるところが大きい。糠千区には、親せきや子どもが都市で生活している住民もおり、住民自体が職を持っている場合もある。選択すれば都市に住むことも可能なのだ。しかし、少なくと

も現在在住している住民は選択的に定住を選んでいる。外部者も同様である。都市に生まれた彼らには、当然都市から動かないという選択肢もある。彼らはそれぞれ、個人の主体性によって糠千区という空間に集まり、混在するのである。前者を構造的な側面、そして後者を主体的な側面として考えていこう。

時間軸と意思決定の質的な軸には、深い関係性がある。過去に開始された構造的な社会化が個人の意思決定の背景を大きく変えていったからである。農村とは、流動型社会論の中では「土着型社会」として位置づけられており「生活の糧が土地を基盤として自給自足に得られる社会」と考えられていた [三浦典子, 2002 年 pp.17]。過疎研究でも 1970 年代までは「農業に従う人々を主体とする地域社会」 [福武直, 1976 年] という定義で問題はなかった。しかし、農村における社会分化が進み、<都市→農村>という動きが顕著にあらわれ都市への人口流出の文脈だけで過疎化が語れなくなった現在だからこそ、意思決定の質的な側面に違いが生まれる。このように、時間的な側面、そして意思決定の質的な側面から住民の生活構造は大きく変化しているのである。Figure4-1 は中山間地域の多様化を Figure1-3 と比較して記した図である。この現状を、いかに理解できるだろうか。

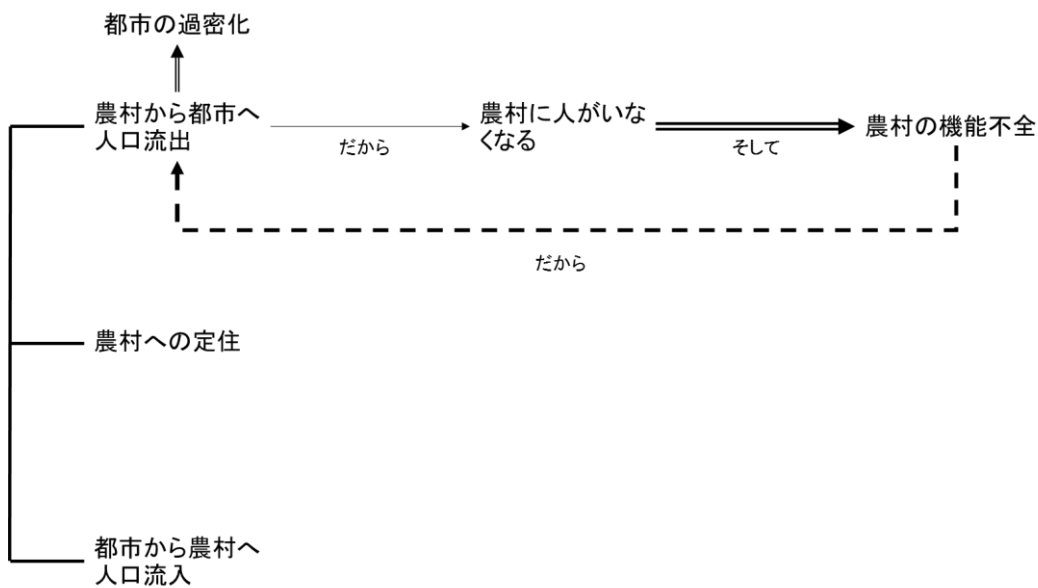


Figure 4-1 中山間地域の多様性

それでは、すでに生活が個人化している糠千区において、外部者との混在が選択的積極性の中で進められている現状は、どのような意味を持つだろうか。そして、その関係性は将来的にどのような価値を生み出すのだろうか。本章では糠千区における生活の個人化と社会移動のベクトルの多様化を時間軸と意思決定の質的な軸で分析をしながら、糠千区の開放性の意味について論じていく。

4-1 糠千区における多様性の形成過程

糠千区における住民生活が個人化している中で、「地域に関わる人々が多様なベクトルを持っている状態」というのは地域の文脈の中でいかなる意味を持っているのだろうか。この問いを考える際、そもそもどのように開放性が形成されているのか、選択的な外部者との混在について把握する必要がある。

糠千区の意味決定に関わる人々は、ここ数年で激変し、異なる移動のベクトルを持つアクターが地域形成に参加している。「意思合意」への参加だけでなく、「意志合意」に参加できないアクターが「意志合意」に影響を与える場合がある。また、意志合意だけでなく行事等への参加有無は住民の中でも集団によってさまざまであり（たとえば、高齢者女性と中年男性では大きく異なる）、もっといってしまえば、その集団の中でも個人差がある。これに外部者が加わるとなると、地域の複雑性は増すばかりである。

地域の住民以外の（意思決定権を持っていない）構成人物を本稿では「外部者」と呼んでいるが、彼らが糠千区の社会構造に少なからず影響を与えていることは第3章で明らかになっている。例えば地域おこし協力隊は糠千区の住民ではないものの、糠千区の住民との信頼関係を築いており、集落の規範性を維持する重要な行事にも参加するようになっている。彼らは行政と住民の間に立ち、柔軟な対応で住民の要望をすくいあげる役割も担っており、その意味では担い手とは言えなくとも地域形成の一端を担っているといつて過言ではない。「外来者」に明確な基準を設けることは難しいが、本章は少なからず地域社会に影響を与える層を分類することを主眼としているため、継続的に集落を訪れている個人はこれに含めることにする。

それではまず、混在状態への選択的積極性が形成される過程を、住民側から考えていこう。

糠千区住民の生活構造の変化と意思決定

混住・混在状態を選択するとき、住民の意思決定は、どのように行われているのだろうか。糠千区の規範性は行事や自治組織など社会資源を社会財に変える活動によって維持されていることは前述のとおりである。そこで、行事と自治組織への住民の参加率を見てみよう。Table4-1は「まつり」「ものずき会」「学生との交流」への住民の参加意識を示した表である[馬場、2013年]。これは各世帯主へのインタビュー調査から抽出したデータである。調査の結果から、住民のほとんどは祭りとそれに伴う行事、神楽には参加していることが分かる。一方で地域の有志によって構成されている「ものずき会」への参加には年齢層と性別に傾向がある。その担い手の中心は50代後半から60代の男性となっている。また、学生との交流とものずき会の参加との強い関連性もみてとることができる。地区の中でも50代後半から60代の男性が都市住民との交流を担っている。この調査からは、確かに地域の規範性を形成する行事への参加率は非常に高いものの、外部者との交流の意思決定は50代後半から60代の男性が担っていることが分かる。

この意思決定を担っている住民層はほとんど集落に居住していながらも外部との接点を

持つ「流動型」の性格を持っている。そして第3章で論じたとおり、生活の個人化が進んでいる糠千区において、昼夜のほとんどを集落の中で過ごす65歳以上の住民を除き、この「流動型」が一般的である。「流動型」の住民とは移住を伴っていないものの平野部で学生や労働職に就いている層をさし、行政職につく、小学校・中学校・高校に通う、DID地区（飯山、小布施など）の製造業者で働くという例がある。彼らは個人の決定により社会的な移動を行っている（ただし、小学校、中学校までは限りなく集団決定に近い）。糠千区は平野部まで車で10分以内、DID地区にも15分から30分で行くことができるため、冬季の路面の凍結や積雪による通行止めさえしのぐことができれば通勤・通学は可能である。「流動型」に対する生活構造に「土着型」がある。糠千区に住む65歳以上の特に女性は、集落の中でもさらに細かい地域ブロック（糠塚と千ノ平）の中で暮らす方がほとんどである。家の外に出るのは毎日30分程度「散歩」で集落を歩く程度で、それ以外の目的でブロックを超えることはあまりない。年齢別に人口集計したTable4-2でいうと、住民全体の70%近くが「流動型」の生活を送っている。

また、意思決定の住民層は、定住年数を軸とすると、ほとんどが世襲世帯の出身である。つまり、糠千への永続的定住者が地域の意思決定を担っている。そもそも36世帯中33世帯が世襲であり、糠千には圧倒的に世襲型の定住者が多いからである¹。

Table 4-1 糠千区での調査メモ (馬場、2013年²⁾)

性別	世帯員数(世帯類型)	祭り	ものずき会	学生との交流
M(91)	1(A)	○	×	▲
M(84)	1(A)	○	×	▲
M(82)	3(C)	◎	×	▲
F(79)	1(A)	○	×	▲
M(72)	7(E)	◎	×	▲
M(69)	3(C)	◎	◎	◎
M(66)	2(B)	◎	◎	◎
M(66)	4(C)	◎	◎	◎
M(64)	2(D)	◎	◎	◎
M(64)	2(B)	◎	◎	◎
M(64)	4(C)	◎	◎	◎
M(63)	4(C)	◎	○	○
M(62)	2(B)	◎	◎	◎
M(61)	3(F)	◎	◎	◎
M(60)	4(E)	◎	◎	◎
M(59)	8(E)	◎	◎	◎
M(58)	2(D)	◎	×	△
F(57)	2(D)	○	×	▲
M(57)	1(A)	◎	○	◎
M(56)	6(E)	◎	×	△
M(53)	5(E)	◎	△	○
M(53)	4(C)	◎	×	○
M(52)	2(D)	◎	△	○
M(50)	3(F)	◎	×	△
M(48)	2(F)	◎	△	○
M(46)	1(A)	◎	×	○
M(45)	3(F)	◎	×	△
M(31)	3(C)	◎	△	○

<p>【世帯類型】 A: 単身 B: 夫婦のみ C: 夫婦と未婚の子 D: ひとり親と未婚の子 E: 世代世帯 F: その他</p> <p>【祭り】 ○: 参加のみ ◎: 準備から参加</p> <p>【ものずき会】 ×: 入っていない △: 入っているつもりはないが、そば祭りの手伝いのみ参加 ○: 入っているが仕事があり、都合がつくときのみ参加 ◎: 入っており、そば祭り以外の活動も精力的に行っている</p> <p>【学生との交流】 ▲: 自分からは参加しないが学生の聞き取りには対応 △: あまり参加しない ○: 都合がつけば参加する ◎: ほぼ毎回参加している</p>
--

Table 4-2 糠千区における年齢別人口集計表

総人口	15歳未満	15～64歳	65歳以上	55歳以上
108	10	63	35	58
	9%	58%	32%	54%

注) 住民基本台帳 (平成 24 年 4 月 1 日現在)

さて、ここまで、住民の意思決定について論じてきた。地域の規範性を形成する「まつり」には「流動型」生活を送る大部分の住民、「土着型」住民を含めほとんどの住民が参加する一方で、外部者（特に学生）との交流に積極的な住民は一定層に集中している。また、積極的な住民層と有志の地域活動「ものずき会」との関連性も高いことが分かる。

外部者<村内居住者>の地域参加

次に「外部者」であるが、ここでは<村内居住者>と<村外居住者>に分けて考えていこう。第一に、<村内居住者>は村内から糠千に通う層である。行政の職員（教育委員会）と地域おこし協力隊（農村文明塾担当）、そして事業コーディネーター（後述）が中心である。糠千区の住民と外部者<村外居住者>との交流は教育委員会の中に設置されている『農村文明塾』がコーディネートしている。糠千区に関わる行政の職員（2~4人）と地域おこし協力隊（2~3人）はこの『農村文明塾』に所属している。彼らは、農村文明塾開催期間とその前後はもちろん、プライベートでも糠千区の行事に足しげく通っており、住民とのコミュニケーションを密にとっている。

『農村文明塾』の中でも特に活動の鍵を握っているのが「農村文明会館」（公民館）の館長を務める A さん（仮名）（事業コーディネーター）と行政の職員 B さん（仮名）である。A さんは地域づくりのコンサルタントとして起業されており、木島平村の出身ではない外部者でありながら 2010 年から村政に関わっている。その A さんを支える立場にあるのが B さんである。『農村文明塾』の計画から実行までをこの 2 人が担う。

開設した当初、『農村文明塾』は村内ではもちろん先駆的な取り組みだった。前例のない新しい取り組みは、コミュニティには好まれない。農村はなおさらである。まさに木島平村が継承している「道祖神」が象徴しているように、外来の流動民は村に新しい風を連れてくるのと同時に、疫病を持ち込むこともある恐れられるべき存在であった。文化継承の行事に外部者が入ることは、結束力の強い地域ほど受け入れにくいと言われている。既存のコミュニティの結束が強ければ強いほど、流動集団との間には緊張が走る [三浦典子, 1991 年]。実際、農村文明塾の創設期には村内どの集落も都市住民の受け入れをいったんは断ったそうである。その理由をある地区の区長は「どんな人が来るかわからないし、そもそも都会に住んでいる人（大学生）がどんなものかが分からないから受け入れることは難しかった。それが区民の総意だった」と話していた³。そんな中糠千区がフィールドになったのは、当時

区長だった C さん（仮名）と B さんに強いコネクションがあったからだったという。B さんは糠千区とは離れた集落に居住する木島平村民である⁴。現在も『農村文明塾』は A さんと B さんが中心となり運営されている。

さて、糠千区に外部者〈村外居住者〉との混住・混在という選択肢を与えたのは、外部者〈村内居住者〉であり、その始まりは B さんと C さんという 2 人の人間関係から始まったことが分かった。糠千区における混住・混在という多様性は、外部者でありながら空間的に近い人との関係性から生まれたのである（Figure4-1 を参照）。

外部者〈村外居住者〉の混在

最後に外部者〈村外居住者〉を考えよう。この外部者〈村外居住者〉には DID 地区からの流入者、地方都市・東京圏からの流入者などが想定されるが、DID 地区からの継続的な流入者は現時点の糠千区にはいない。糠千区への流入は、『農村文明塾』の参加者である地方都市・東京圏から年間 10~20 人を超える大学生が中心である。『農村文明塾』は早稲田大学・金沢大学と連携している⁵（2013 年現在）。

糠千区に通う回数や滞在期間は個人によるが、多い学生で月に 2 回程度、平均的で 3 か月に 1 回くらいの頻度で 1~2 年通うケースが多い。これは学生との交流が 3 年前前から始まったこと、そしてコンソーシアムが四半期に 1 回程度であることが大きい。ただし、農村文明塾のイベントは糠千区の行事予定によって臨時的に増えることが多く、実際は年間 8 回程度の学生招致を行っている。学生は東京か金沢に居住していることが多い。木島平村役場と関係性が深い金沢大学、そして早稲田大学の学生が中核となっているからである。農村文明塾コンソーシアムがあるとバスが出て、行き来しやすくなる。最後にその他の事例であるが、大学を卒業した社会人なども定期的にやってくる。

ここで分かるのは、外部者〈村外居住者〉は極めて強い意思決定のもと糠千区を訪れ、関係性を築いていることである。これまでの混住化と考えられてきた地域は、都市と農村の間に形成されることが多いこともあり、社会構造的な側面が強い傾向にあった。糠千区における外部者〈村外居住者〉の流入により、現在の混在状態が将来的に混住状態になると、これまでの認識とは異なる主体的な混住化社会が形成されることになる。

混在する地域を維持する社会構造の分析

交流を継続的なものにしていくのは担い手の中で述べた「ものずき会」（≡（実質）「清流の郷委員会」）の人々と、『農村文明塾』A さん、B さんである。

本章の冒頭で述べた通り、人の意思決定には、社会状況に決定が依存する場合（社会構造的側面）と住民が主体的な決定をしている場合（主体的側面）の 2 つの側面があった。この視点に立ち返ると、糠千区の混在状態は、構造的な要素を残しているものの、住民（特にもものずき会≡清流の郷委員会）と外部者〈村内外来者〉による相互の選択で混在状態が成立しており、主体的な側面が強くていられる社会状況と理解できる。

混住化は前述の通り、二宮ら（1985年）によれば、「従来主として農家のみによって構成されていた農村村落が、非農家が流入してきたことによって変貌を遂げ、新しいタイプの地域社会として性格づけられることを余儀なくされた社会」と定義づけられているし、徳野（2008年）によると、この「混住化」は農村住民が都市へ流れ込む、「農村の都市化（＝異質化）」にとらえられている。しかし、糠千区における混在状態はこの農村住民が都市へ流れ込むタイプの「都市化」とは全く異なるのである。このように、外部者＜村内居住者＞の仲介のもと、住民と外部者＜村外居住者＞が選択的積極性のもと交流することで、糠千区は糠千区自体の過去にもなく、他の地域にもないような「多様性」を地域社会に持つようになったのである。

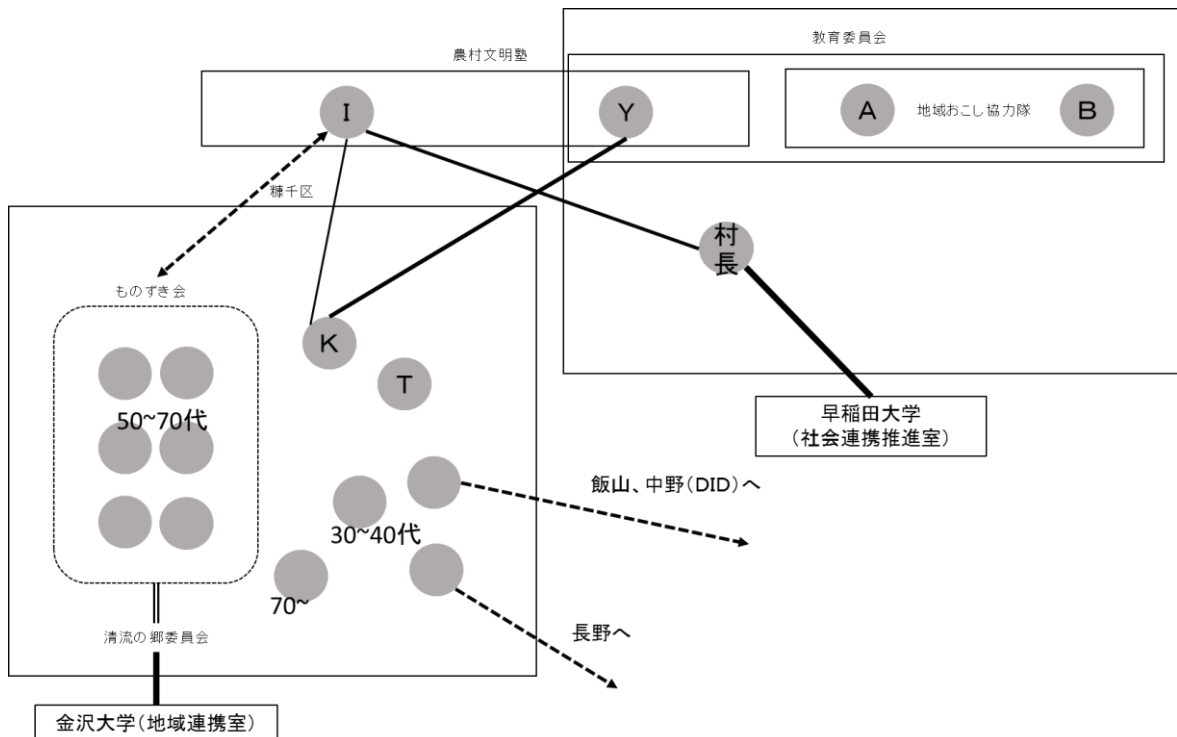


Figure 4-2 糠千区の構造

4-2 糠千区における「都市・農村交流の地域づくり」の展望

さて、本章では糠千区における住民と外部者＜村内居住者＞＜村外居住者＞の混在・混住による地域形成と、多様化について論じた。その議論をふまえると、糠千区の現状と将来的な糠千区の地域形成を Figure4-2 のように説明することができる。

第 3 章で論じた地域の特異性と選択的な定住は、すでに社会化の進んだ糠千区地域の規範性を形成するものとなっている。そして、糠千区においては、外部者と住民の主体的選択による流入・受け入れが、地域の特異性を深め、これからも地域の多様性を形成していくだ

ろう。

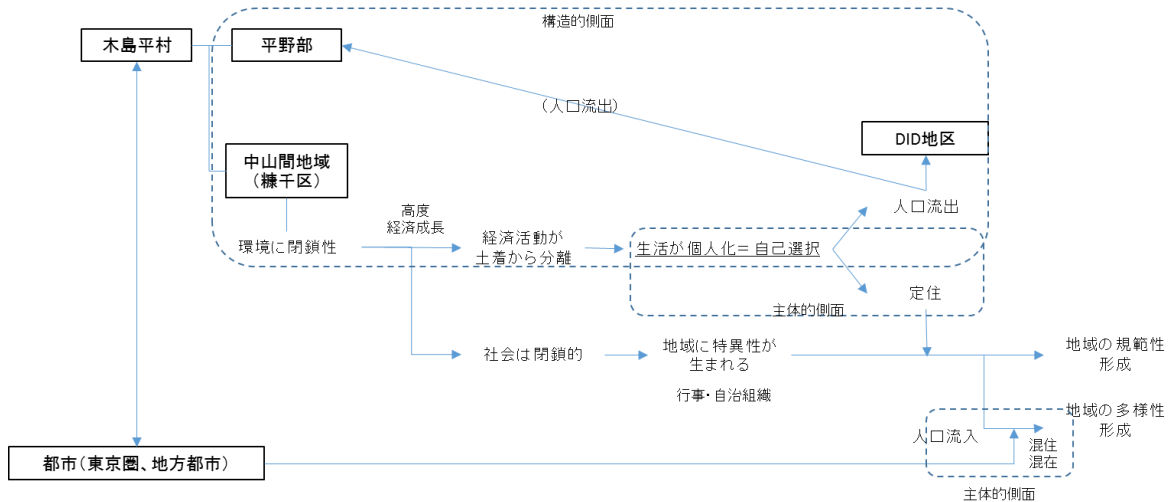


Figure 4-3 糠千区の地域形成分析図

とすると、糠千区において、外部への開放性はどのような意味を持つのだろうか。本章では、住民と外部者がそれぞれ選択的に混在を進め、それが地域の多様性を形成する過程を述べたが、ここでいう開放性とは、糠千区の「特異性」（糠千区住民が独自に形成するものであり、地域を異質にしていく）を地域の「多様性」（糠千区住民と外部者を含む糠千区関係者が形成するもの）にするものとして位置づけられないだろうか。地域の「多様性」を具体化したものは、個人が自由に選択できる地域の資源となりうる。住民の個人化が進む糠千区においてこの自由選択が可能な資源の創出は不可欠であり、開放性は糠千区の住民と糠千区の自由選択肢を選びたい外部者にとって重要な意味持つのである。

ただし、この先混在状態が混住化に転じたとき、地域の多様性の創出は一方で、規範性の維持と対立する可能性がある。規範性の担い手がほぼ住民全体であるのに対し、多様性の創出を担う住民層が限定的である現状のまま混住化が進むと、自由選択を望む外部者とその準備ができていない住民の間に齟齬が起るかもしれない。

これからの糠千区を考えると、上記のような対立が生まれることを避けるためにも、外部者を含めた関係者それぞれが地域の特異性の形成から規範性、多様性までをしっかりと意識し、意思決定に参加していくことが求められる。むしろ糠千地域に入る外部者は、自分と住民の自由選択を形成していくために、この点を理解している人でなくてはならないだろう。また、それは「全員がすべての意思決定に参加しなくてはならない」ことを意味しない。それこそ関係者の間に多様な選択基準があることを考慮し、思いやりの中で意思を反映させていくことが重要である。

¹残りの3世帯は単身、または世帯で移住している場合である。

²馬場（敬称略）は2013年8月以降、糠千区36世帯中28世帯に対しアンケートと聞き

取り調査を行った。この調査メモは彼女の発表論文から抜粋したものである。

³ 2013年11月1日インタビュー。

⁴ Cさんが区長を降りてから現区長Gさんとの対立がおこり、Cさんは外部者（学生）との交流活動からは身を引いている状態である。

⁵ 早稲田大学社会連携推進室は『農村文明塾』が始まる前の2010年から企画課と連携して『プロフェッショナルワークショップ』を開催していた。『農村文明塾』の開設に早稲田大学元総長の奥島教授と社会科学部の宮口教授が参画したことで以降の活動に早稲田大学が関わる運びとなった。一方金沢大学は、隣村の飯山市出身の学生の勧めで、学部生のインターンシップの受け入れ先として木島平との親交が始まった。以降、担当の神谷教授が紹介した学生及びインターンシップ希望者が継続的に木島平村に訪れるようになっている。

第5章 中山間地域と「過疎化」の展望

本稿では、第1章から第4章を通し、対象地域である長野県木島平村糠千区の住民の生活構造を分析する中で、中山間に位置する過疎地域における開放性の意味を論じた。糠千区では都市化の象徴である「生活の個人化」がすでに高度経済成長期から進行しており、現在は外部との開放性の中でそれぞれの自由選択による地域資源の社会財化（資源を利用し、社会との接点を持つ）が進んでいる状態であると述べた。

現代の「過疎化」は単に「人口が流出した」という事実だけで語りきることはできない。第4章で糠千区が外部者との交流から多様性を創出していると述べたように、中山間地域の在り方は多様化し、同時に「過疎化」の現状も多様性を増しているのである。

「過疎化」の多様性は、「深化」という側面から語ることもできる。中山間地域の過疎化はますます根深くなっており、「働き手がない」という人口流出の状態から「働き手も子どももない」[今井, 1968年]少子高齢化状態に発展しているのは第1章で述べたとおりである。それが影響し、中山間地域の機能が少しずつ低下している。深化のみならず、面的な広がりも進む過疎は、すでに一様ではなく、その生じ方は地域によって多様である。地域の中でも「集落間格差」といわれるほどに、その多様性は幅をまし、住民の意識の中に格差を芽生えさせている。

さて、そこで第5章では5-1で糠千区の事例を用いながら現在の中山間地域の「過疎化」の現状と展開について論じる。そして5-2でこれからの中山間地域と「過疎化」が社会の中にどう位置付けられるかについて述べていく。

5-1 中山間地域における「半農半都市」

糠千区は過疎中山間地域でありながら、すでに「生活の個人化」つまり「社会分化」（社会化）の傾向があることはすでに論じてきたとおりである。一般的には都市化の過程で生じる「社会分化」が過疎中山間地域で起こっているこの傾向は、どのような意味を持つのだろうか。

第一にその状態は、中山間地域という地形（環境的要因）と高度経済成長期の近代化が住民の経済活動を変化させたことでもたらされた。加えて、糠千区において個人化した生活（「流動型」の生活とも言い換えられる）と「土着型」の生活が両立していること、そして外部者との交流が継続的に行われていること（選択的積極性の中の混在が進んでいる現状）は50代後半から60代男性による意思決定あつてのことである。意思決定住民層は、第4章で論じたように、働き手として活躍した30~40代のころ、つまり1970年代以降、自動車普及し糠千区においても交通事情の厳しさが緩和された時代に、平野部やDID地区に出て働いていた背景をもっている。しかし、彼らが平野部またはDID地区との関係を持っていたこと自体、中山間地域には特に冬季になると主要産業が炭焼きに限定されてしまい、しかも大量生産の傾向には耐えられないという制約、つまり根本的な社会構造が反映された

結果であることは言うまでもない。いずれにしても、このような住民生活の「個人化」は言い換えてみれば、農村の色濃い文化を残しながらも社会構造の一部が「都市化」している状態だということができないだろうか。

ここで問われるのは、農村とは何か、都市とは何かという点である。山本（1996年）は<都市→農村>という人口論的なアプローチだけではなく、現代の過疎問題には新しい局面があることを述べている [山本, 1996年]。ソローキンとツインマーマンは都市と農村の差異を単なる「職業」に求めるのではなく、多元的な判断基準を用い、都市と農村の総合的な希薄化の先に「半農半都市」(Rurbanization)があるとした [ツーツマン C., 1977年, pp.4]。実際、産業別就業人口の増減と構成比を過疎地域と全国とで比較した山本（1996年）によれば、1990年の時点で全国過疎地域と全国の職業構成は「基本的に同型化」しており、これを「半農半都市化のプロセス」だとしている [山本, 1996年, pp.180]。すでに現代の社会において、農村とは、都市とは、という議論は無意味なのかもしれない。糠千区をはじめとする一部の中山間地域、過疎地域ではすでに、「半農半都市化」が進行しているのである。

5-2 中山間地域と「過疎」のこれから

現代の過疎、現代の山村(そして中山間地域)は多様であり、それらをとらえるためには、対象地域を取り囲む広域自治区、周辺集落、そして中間都市や大都市といった広い範囲の関係性を紐解き、それらが対象地域とその住民にいかなる影響を及ぼすにかについて考えをおよぼすことが求められる。さらに、広域から農村をとらえるというマクロの視点だけでなく、一つひとつの社会に対応するミクロの視点が必要である。その視点とは、社会をさかのぼれば人と人との接点に帰着することからも、個人の生活構造を具体的に考えることを意味する。

また、従来の農村研究の中核を占める「どうして人が出ていくのか」という流出の側面に加え、「どうして人は定住するのか」といった定住的側面、「どうして人が入ってくるのか」という流入的側面にも目を向けなければならない [山本努, 1996年, pp.224]。

ここで注意しておきたいのが、「人が少ない」ということと、住民の生活が豊かか、というのは別の概念だということである。中山間地域の自治は決して過疎への対策を使命としているのではなく、あくまで住民やそこに関わる人々が豊かであるための機能体である。しかし、過疎化の進行による機能不全が住民の「社会財」を損なう可能性があることを忘れてはならない。この社会財の喪失こそが豊かさの危機であり、未然にその喪失を防ぐ取り組みが必要である。

本稿で調査の対象とした糠千区は、都市住民との交流という選択をし、混住まではいかないものの積極的混在化を進めている状態である。中山間地域という閉鎖的なコミュニティが交流という開放性に触れることは、まさに「半農半都市化」という多様性の創出を加速させることとなり、同時に、集落を不安定な状態にさせる。糠千区でいえば、学生を迎えると

き、彼らが卒業し就職して村との行き来が少なくなると、あるいは地域おこし協力隊が任期を終え集落を去る瞬間に住民が経験する若干の憂慮がそれにあたるだろう。ところが一方で、その開放性は結果的に、通常不明瞭である社会財を秩序付ける意味を持ち、それらを保存・維持する理由をつくるのである。これが地域の多様性の形成であり、この効果は、コミュニティが閉鎖的であればあるほど大きくなる。

今後糠千区をはじめとする中山間地域で「半農半都市化」をはじめとする多様化が進むとすれば、住民は生活のさまざまな場面で選択の回数と幅を持つようになる。人々の生活の構造は多様化する。諸場面において、関係する人々それぞれの常に豊かさが異なることを認識し、その豊かさと向き合いながら地域づくりを進めていく必要があるのではないだろうか。

終章

11月。木島平を取り囲む山々は、見慣れた山の面影を残しながらも、雪解け水をいっばいに受けて花をつけ始めた初春とは全く異なる様相を見せてくれる。車で10分走るともう、目の前を彩る木々の色が変わり、平野部で見た穏やかさはどこにいったのか、川が一変し激しく唸り始める。糠千はそんな風景の、もう少し先にある。

「おれたちや、小学生のときから一緒だっちゃ。もう見知った仲でえ」。糠千の男性は強くないが酒が好きで、懇親会となると常にグラスに並々と注がれている。「きみならできるよう、頑張ったんだろお」と、酔っぱらったついでに涙を流し、大学生の成長と卒業を祝う声。学生を受け入れることに少なからずためらいがあったに違いないのに、人間関係をとっても大切に。「彼氏とか家族とか、連れてきてくれたら、うれしいなあ。そういうのがうれしいんだからよ。」そして最後には「また絶対来いよ!」と、見送ってくれる。

「おんなじかつこで座っていると、足が固まっちゃうんだあ」「お茶会がまた、楽しいんだあ」と語るのは、70代80代の女性たち。10月の中旬に行われた村民運動会では8年ぶりの出場に、彼女たちと少し若いお嫁さんたちの煮物やおにぎりが花を添えた。

グローバル化が進み、人の生活と暮らし(地域)の空間が必ずしもイコールではない現代。しかし人の生活の豊かさは、新しく目に映るものや出会い、挑戦だけにあるのではなく、暮らしという空間にも存在するものであり、空間的な暮らしの豊かさを欠いた人の生活はある種、空虚である。筆者自身がそれを痛いほど感じている。本質的に人が生きることとは何なんなのか。すでに都市で生まれ都市の文化が身につけてしまった人が、地域に生きる活路を見出すことはできないのか。そして、そういった意味で都市と農村の関係をもう一度しっかり考えたい。早稲田大学社会連携室から長野県木島平村の紹介を受けたとき、半端な覚悟で農村に入ることがいかに失礼なことか漠然と認識しながらも、何か大切なことがそこにあるのではないかという期待で木島平村に足を向けた。

糠千区に通うようになり、一様に「木島平」といっても集落によって性格が違うことに気がついた。過疎といわれる地域にも、多様性があることを学んだ。しかし一方で、これまでイメージしていた「農村」の生活と糠千区の生活の構造が微妙にずれていることに気が付いた(イメージしていた村落では土を基盤に生計を立てる生活であったが、糠千区では土は暮らしの基盤であるが、雇用を中心とする経済活動によって生計を立てる生活が営まれていた)。このズレこそがこの論文で記した中山間地域の社会分化、つまり、「半農半都市化」である。この半農半都市化の現象が地域にとってマイナスとなることなく、住民の豊かさを高めるものであってほしいと願いその理論系を合わせて展望を書き記そうと考えたのが、この論文に至った経緯である。

さて、この論文は長野県木島平村と糠千区の分析を中核に、中山間地域と「過疎化」について、以下のような構成で論じている。

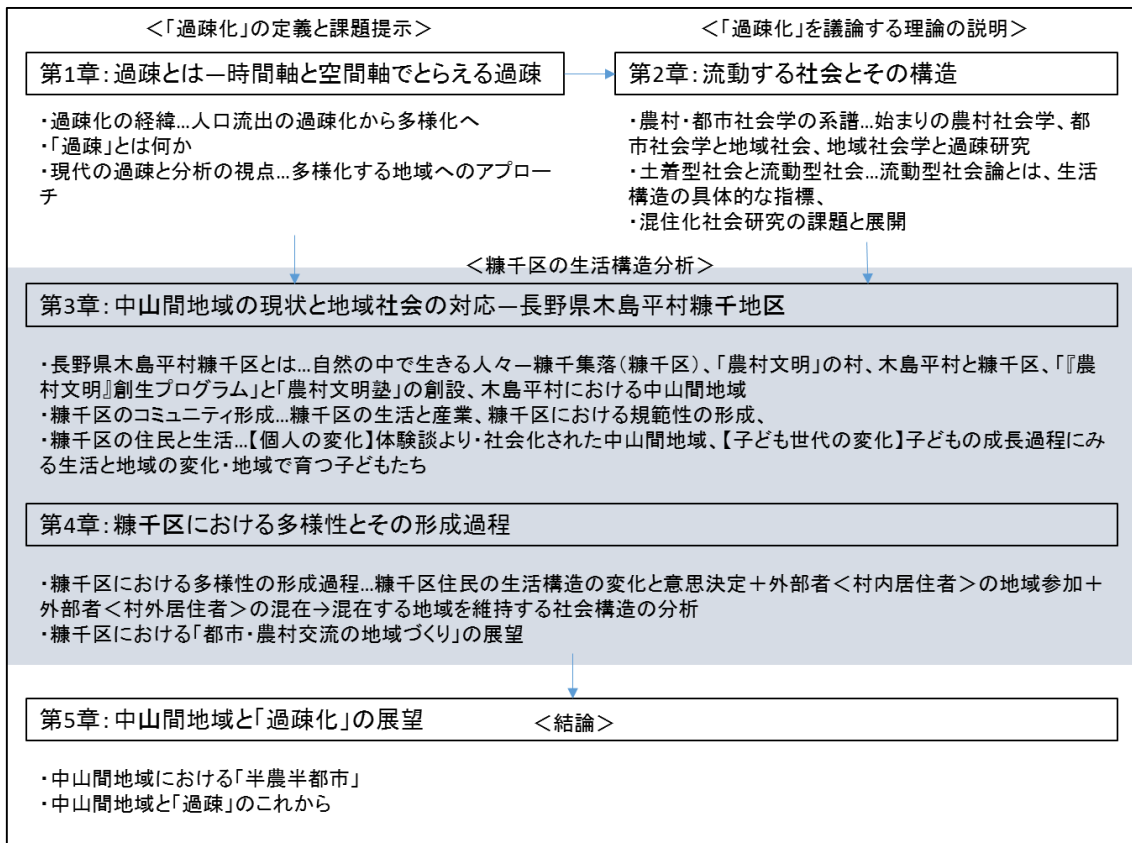


Figure 6-1 本稿の概要とまとめ (まとめフロー図)

第1章と第2章は本稿の先行研究とし、過疎化の概念から中山間地域と過疎考えるうえで個人の生活レベルにまで迫るミクロな視点と、それを社会の中に意味づけるマクロな視点を持ったうえで構造的に研究していくとい重要な切り口を述べた。第3章では長野県木島平村の規範性が形成されるまでを地域という空間に加え、個人、世代といった生活基軸にしたがって分析した。さらに、第4章では各関係アクターに分析を加え、地域の異質性が、空間の開放性の中で多様化していくことを論じた。そして総論として位置づけた第5章で、糠千区の事例を用いながら中山間地域と「過疎化」のこれからについて論じた。

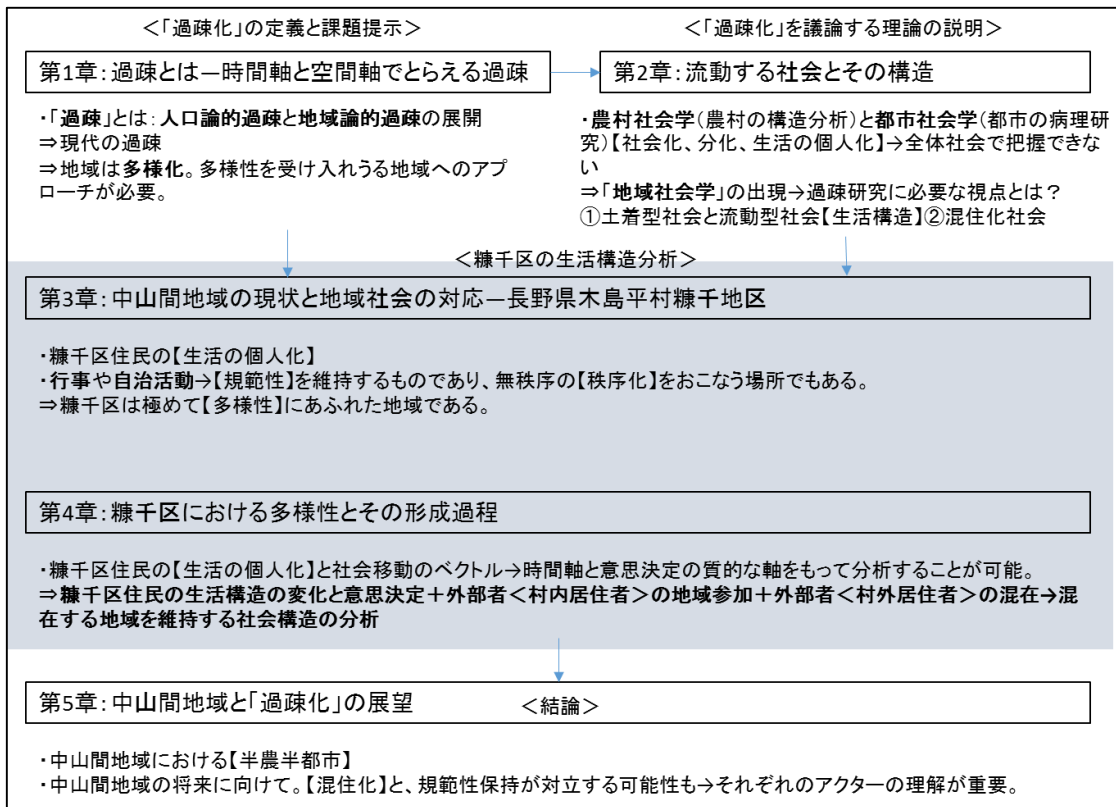


Figure 6-2 本稿で用いられた概念のまとめ (概念のフロー図)

総括すると、本稿序章～第5章の中で重要な点は以下の点である。

1. 中山間地域が多様化しているということ。
2. 現在の過疎を分析する際、地域住民が多様であることを認識し、人口流出論だけではなく、定住論、流入論の側面から分析する必要があること。
3. 過疎について分析する際、住民の生活構造を分析する必要があること。
4. 糠千区では、「生活の個人化」の傾向がみられること。
5. 糠千区は選択的に、開放性の中から社会財を見つける過程を経ており、これが地域の多様性を創出していくこと。
6. 中山間地域の多様化は半農半都市化という方向性を見出していること。

今後の過疎研究においては、上記の論点を含め、あらゆる性格を持つ農山村と中山間地域の研究、そして考察が展開され、生活構造の分析が進められていくことが望まれる。多様性の創出は、机上の言葉で終わらせるのでも、また地域の中にしまったまま無言で終わらせるのでもなく、実際に地域で起こることを秩序化することで実現する。それが一つの開放性であり、この開放性を生み出すことが地域社会学の役割でもある。

この論文は中山間地域の一考察に過ぎないが、本稿を含むそれらの研究が地域に暮らす

「中山間地域の現状と新しい地域社会の形成に向けて―長野県木島平村糠千区を事例に―」

久保 唯香 (1T100351-8)

人々とその地域に関係する人々の豊かさにつながっていくことを願ってやまない。

謝辞

本稿の執筆にあたり、たくさんの方々にお世話になりました。その一部を僭越ながら以下に記させていただきます。

- 木島平村糠千区の皆様、

おいしいご飯と温かい笑顔をありがとうございました。過去のことから将来のことまで話しに耳を傾け、アドバイスくださったこと本当にうれしかったです。「ムカデの久保さん」とたくさん声をかけてくださったことで、少し地域に近づけた気がしました。私のような学生を受け入れることに抵抗もご苦労もあるかと思いますが、これからも糠千の生活を豊かにするために、そして豊かな生活を共感できる若者を育てるために、交流を継続していただければ本望です。また行きます！ありがとうございました。

- 木島平村教育委員会農村文明塾の皆様、産業課の皆様、木島平小学校 関校長、

論文執筆にあたり、そして糠千区の皆様との交流にあたり、多大なるご協力をいただきました。ありがとうございました。お一人おひとりの木島平や糠千区にかける思いにとっても感動しています。これからも日本人の故郷を、みなさんの手で守り抜いていただきたいです。私自身は今後も仕事、プライベートを通して何か一助となれば幸いです。

- 農村交流会館館長 井原様、

お休みのところご多忙の中、たくさんお時間をいただき、「地域活性化とは何ぞや」という話しに付き合ってくださいました。木島平村をベースに論文を執筆しようと考えたきっかけのひとつが、井原さんが執筆なさった「村長サミット」の記事でした。全国の地域を見てきた井原さんの目に映る木島平を理解しえたとはい底思えませんが、その心意気に非常によい影響を受けました。今後のご活躍をお祈りしております。ありがとうございました。

- 木島平村地域おこし協力隊の皆様、

糠千と農村交流会館（宿泊所）の間を何往復していただいたか分かりません。また、どんな飲み会にも参加してくださいました。皆様とのたわいもない話しかたたくさんヒントを得ました（論文執筆に限りません）。心から感謝いたします。これからも村の生活を求める学生たち、若者をよろしく願いいたします。

- 金沢大学 神谷教授、馬場さん、インターン生の皆様、

先生や学生のみなさんの地域感あふれる考え方や雰囲気に底知れない魅力を感じ、金大祭まで押しかけてしまいました。金沢でもお蕎麦は美味しかったです。学生の皆様へ、地域を担うリーダーとして、これからの活躍と思いやりの力に期待しております。ありがとうございました。

- 早稲田大学社会連携室 奥山様

奥山さんに初めて木島平村を紹介していただいたときから、木島平村に対してワクワクした楽しい感情しか持っていません。時にリードしてくださり、時に考えさせてくださる奥山さんの力は、木島平に関わる学生に大きな影響を与えています。いつもありがとうございます。

「中山間地域の現状と新しい地域社会の形成に向けて―長野県木島平村糠千区を事例に―」

久保 唯香 (1T100351-8)

上記に記載できなかった方々にも、木島平という地域に関わるにあたり、多くの学びと反省と喜びをいただきました。心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

久保唯香

参考文献

- A.トフラー. (1982年). 『第三の波』. 徳岡孝夫監訳、中央公論社.
- ツイーツマン C.ソローキン P.A. (1977年). 『都市と農村』(京野正樹訳). 巖南堂書店.
- 井原満明. (2012年9月号). 「『全国村長サミット in 木島平』を開催 都市と農山村漁村の連帯・共存で将来像を描く」. 『毎日フォーラム 日本の選択』.
- 国土交通省、新潟県上越市. (2008年). 『平成19年度国土施策創発調査 村格・都市格の形成(郷土への誇りを育てるまちづくり)に向けた推進方策調査 報告書』. 新潟県上越市: 国土交通省、新潟県上越市.
- 今井幸彦編. (1968年). 『日本の過疎地帯』. 岩波新書.
- 三浦典子. (1984年). 「生活構造概念の展開と収斂」. 現代社会学会議編『現代社会学』18号(アカデミア出版).
- 三浦典子. (1991年). 『流動型社会の研究』. 恒星社厚生閣.
- 三浦典子. (2002年). 「流動型社会論の系譜」. ミネルヴァ書房『地域社会学の現在』.
- 山本努. (1996年). 『現代過疎問題の研究』. 恒星社厚生閣.
- 山本努、徳野貞雄、加来和典、高野和良. (1998年). 『現代農山村の社会分析』. 学文社.
- 榛村純一. (2007年). 『生涯学習まちづくりは村格・都市格へ』.
- 西村八重子. (2006年). 「<農村一都市>の社会学から地域社会学へ」似田貝香門監修『地域社会学講座1 地域社会学の視座と方法』第1部第2章. 東信堂.
- 総合研究開発機構. (1998年). 『中山間地域のあり方に関する研究(台2期)』.
- 総務省自治行政局過疎対策室. (2013年年12月月7日日). 過疎対策の現況(平成23年度版). 参照先: 総務省: http://www.soumu.go.jp/main_content/000186144.pdf
- 蔵内数太. (1978年). 「社会学」. 『著作集』第1集、関西学院大学生生活協同組合出版会.
- 大野晃. (2005年). 『山村環境社会学序説—現代山村の限界集落化と流域共同管理—』.
- 長野県木島平村「農村文明塾」編集・発行. (2012年). 『平成23年度大学コンソーシアム木島平校の記録』. 長野県木島平村: 長野県木島平村「農村文明塾」.
- 長野県木島平村「農村文明塾」編集・発行. (2012年). 『平成23年度農村学講座の記録—自らの足下を見つめよう—』. 長野県木島平村: 長野県木島平村「農村文明塾」.
- 堤マサエ、徳野貞雄、山本努. (2008年). 『地方からの社会学』.
- 田畑保編. (1999年). 『中山間の定住条件と地域政策』. 日本経済評論社.
- 渡辺兵力. (1967年A). 「過疎概念と過疎問題」. 『山村地域人口流動の諸問題』山村振興調査会.
- 渡辺兵力. (1967年B). 『地域農村計画—その考え方と進め方』. 全国農業会議所.
- 二宮哲夫. (1985年). 『都市・農村コミュニティ: 社会学の理論と実証』. 御茶ノ水書房.

- 福武直. (1976 年). 『日本の農村社会 (著作集第 4 巻)』. 東京大学出版会.
- 木島平村役場. (2012 年 8 月号、12 月号、2013 年 1 月号、2013 年 11 月). 「広報木島平」、
「農業委員会だより」、「館報生き活き木島平」、「社協だより」. 木島平村役場「広報
木島平」、「農業委員会だより」、広報誌『自然劇場 きじま平』.
- 木島平農村交流型産業推進協議会. (2010 年). 「『農村文明』創生プログラム」. 木島平村:
木島平村役場 交流産業推進室・生涯学習課.
- 矢崎栄司. (2012 年). 『僕ら地域おこし協力隊—未来と社会に夢をもつ—』. 学芸出版.
- 鈴木栄太郎. (1957 年). 『都市社会学原理』. 有斐閣.
- 鈴木広. (2002 年). 『地域社会学の現在』.
- 鈴木広・倉沢進 編著. (1984 年). 『都市社会学』. アカデミア出版.



「農村版大学コンソーシアム」で来村した学生が、その後集落に繰り返して来訪し、集落の行事などに参加することによって、集落の盛り上げに貢献しています。村民運動会では、糠千区が学生の力を得て、8年ぶりの参加が実現しました。また、糠千区の有志で行う「糠千新そば祭り」にも学生が手伝いに駆けつけました。



特別賞を受賞した久保さん



集落の人と一緒に昼食



そばクレープ作りを手伝う学生

◇村民運動会に大学生の力を得て8年ぶりの参加
10月13日に開催された村民運動会に、大学コンソーシアムで糠千区を訪れた金沢大学、早稲田大学、宇都宮大学の学生が、友達を誘って参加し、糠千区の選手として活躍しました。糠千区は、若者が少なくなることからしばらくの間、参加を見合わせていましたが、糠千区のリピーターの学生を特別に選手として認めてもらい、8年ぶりの参加となりました。ムカデリレーでは、女子学生が活躍し、久保唯花さん（早稲田大学4年）は、先頭として力強くリードしたことが評価され、実行委員会特別賞を受賞しました。終了後の反省会では、久しぶりに参加した運動会での健闘をたたえ合い、大いに盛り上がりました。

◇糠千新そば祭りを手伝い
糠千ものずき会で毎年秋に行っている「糠千新そば祭り」が、10月20日に開催され、8月の大学コンソーシアムで集落を訪れた金沢大学と東京農工大学の学生が訪れ、手伝いに加わりました。今年度は、同日に樽滝落水が行われ、多くの観光客が訪れたことから、例年以上の来客数がありました。学生は、ものずき会のメンバーと一緒に接客やそばクレープ作りを行い、持ち前の明るさと若さで訪れた多くのお客さんを和ませていました。

資料1<解説>

糠千区が8年ぶりに村民運動会に出場したことを載せた記事（木島平広報誌）である。この2週間後、金沢大学で行われた学園祭（金大祭）に糠千名物の「そば」と「そば粉クレープ」を出店した。



2013. 11
きじま平

「農村文明」の創生に向けて④



5000人の開花宣言
この大地に
日本人の暮らし
木島平村

金沢大学 「まちづくりインターンシップ」 参加学生が成果を報告

金沢大学地域創造学類2年生4人が、10月11日(金)役場において、8月に開催した農村版大学コンソーシアム木島平校夏季講座へ参加した成果と、これからの提案について発表する報告会を開きました。



糠千区の人が質問

◆**学年を超え全体のまとめ役に**
インターンシップ参加学生は、2年生であり、他の参加者の多くが3〜4年生の中、事務局と事前に各学期の趣旨や全体の構成を議論したため、参加学生の中ではまとめ役として活躍しました。普段の学校では学年を超えてのまとめ役は難しいところですが、他大学の学生が多く参加するコンソーシアムならではの経験が生まれました。その経験からコーディネート力、コミュニケーション力が身についた、との評価が大学からも上がっています。

◆**農村版大学コンソーシアム木島平校へ参加**
村では、大学や学部にとらわれず村をフィールドに、日本の原風景である農村の歴史や文化、自然環境、「暮らしと生業」を体感するとともに、集落の方との一人ひとり顔が見える交流、そして参加した学生同士の交流を目的に、「農村版大学コンソーシアム木島平校」を平成23年度から始め、今年3年目を迎えました。
今回は、8月7日(水)〜9月2日(月)の27日の間に、1学期(5泊6日)を、4回(4学期)設定し、その中で金沢大学のインターン生は、14日間参加しました。

◆**課題を持って参加、具体的な提案へ**
集落へのリピーターを増やすことや、参加学生のネットワークづくりについて、学生ならではの視点で具体的な提案がされました。最後に、提案の実現に向け引き続き村を訪れる決意が示されました。

新規事務局員の紹介 地域おこし協力隊 宮地治樹さん



宮地 治樹さん
(南 鴨)

はじめまして、宮地治樹と申します。11月から「地域おこし協力隊員」として農村文明塾事務局に着任いたしました。埼玉県出身、44歳、AB型、既婚です。今年の春まで東京で、印刷物のデザイン会社に勤めていました。子どもの頃からキャンプやスキーに訪れていた長野県での生活にとっても興味を持っていました。この度、木島平村とご縁が出来「農村文明」の取組に携われることに今からワクワクしています。公私の隔てなく、村内あちこちに顔を出してみたいので、皆様よろしく願いいたします。追伸：東京在住の妻を四季ごとに招き、「村の魅力」を伝えたいと計画しています。

農村文明塾事務局(農村交流館) 電話(82)2041

資料2<解説>

金沢大学の学生が木島平村でのインターン経験を発表したことが木島平村の記事に取り上げられた。糠千区からも数名発表会に参加した。



写真1<解説>

このきのこ農園は 1990 年代に田んぼを埋め立ててつくられた。中山間地域から移住してきのこ工場を開く住民もいる。



写真2<解説>

糠千区のちょうど隣に位置する中山間地域、馬曲区にある馬曲温泉からの景色。正面にスキー場が見える。



写真3<解説>

村民運動会が行われたけやきの森公園からの景色。(2013年 11月 13日)



写真 5<解説>

村民運動会では消防団の早着
替え競争が行われる。



写真 6<解説>

糠千区の男性の中には、そば
の打ち手の資格を取得した方
もいらっしゃる。



写真 7<解説>

糠千区公民館での打ち上げ。
行事の後の恒例となっている。



写真 8,9<解説>

道祖神づくりの過程と出来上がり。仕上がるまでに1日を要する。



写真 10<解説>

炭焼き小屋。「ものずき会」では炭焼きの文化を残すために毎年炭焼きを行っている。